

京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

山 本 真 吾

目 次

- 一、序
- 二、書誌の概要
- 三、構成
- 四、所収表白の作者について

一、序

此度、京都女子大学図書館御当局の御許可を賜り、第一一七九五七・一一七九五八・一一七九五九号として所蔵されている表白集三冊の写真を掲載して大方に紹介出来る事となった。この書は、第一・第四・第六のみの零本であるが、鎌倉中期頃の書写と目され、表白集の成立発達の研究に關して逸すべからざる文献であり、仏教史学・国語学・日本漢文学等の諸学にとつて重要な資料であると思われる。ここに以下、簡単ながら解説を付しておくこととする。

二、書誌の概要

本書は、京都女子大学架蔵になつてから改装されて、美濃判横綴の冊子の形をし、納戸色緞子地表紙となつているが、原装は、三冊共、豎半切の袋綴であつたと見られる。(1)恐らく紙背が容易に見られるように袋になつている所を開綴し、裏表

仮名字体表

①表白集第一（各欄内、上段が一次仮名、下段が二次仮名）

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン		ラ	ヤ	ア	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	ワ	ラ	ヤ	ア	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
置符	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ス、ム	キ	リ				ニ	チ	シ	キ	イ
	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
コ、ニ		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	ル		ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
		レ			ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
		レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ヲ		ヨ	モ	ホ		ト		コ	オ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	

②表白集第四

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
置符	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
夕	井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
夕		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
夕		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
夕	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
夕	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
夕	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
夕	シ		ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

③表白集第六

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	ワ	ラ	ヤ	マ マ マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
疊符	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ツム		リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
					ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

見られる横綴としたものであろう。) 原装は、打付けに「表白集第一」「表白集第四」「表白集第六」とそれぞれ外題されていたと考えられる。次丁に、「表白集第一」結縁灌頂三昧耶戒 同初夜「表白集第四」塔供養付泥塔 堂供養「表白集第六」修法 護摩 供養法と内題が記され、その下に「京都女子大学蔵書」の朱印を捺す。料紙は楮紙で、第一―二十一丁・第四―十九丁・第六―十四丁、縦二九・八糵・横四七・二糵、無界で字高二・五糵前後、一片面十八行、一行十八乃至二十字を記す。本文には墨筆で傍訓・返点・合符・声点が施されている。

本文は、三冊それぞれに別の手で書かれており、本文と傍訓の仮名等との関係は次の如くに判ぜられた(別掲仮名字体表参照)。

第一には、本文とは別筆の仮名が二種認められ、後筆の仮名は異本との校合の際に加えられた注記の字体と一致し、この時に加点されたものと見られる。第四の仮名は、一種であつて本文とは別に加えられたものであり、第六の仮名も一種であるが、これは本文と同手であると認められた。このように、書写の事情はそれぞれに異なっているようであるが、傍訓の仮名は、三冊共、ほぼ鎌倉中期頃(後期に近い頃か)と判断される。

尚、三冊共、書写識語等は見られない。

三、構 成

ここで、本書の構成について、二、三、私見を交えながら述べることにする。

まず、左に各冊の所収表白の標題並びに作者名を掲げる。また、参考として、異本との校合の際に注記(イ注記)が加えられている場合や他の文献に同一本文が見出せる場合にはその旨を記し、加えて、現段階で作成年代を推定し得た表白文については、その年月及び典拠を示すこととする。(1)(2)(3)、○印、①②等は筆者が仮に加えたもの)

(1)表白集第一 結縁灌頂三昧耶戒 同初夜
伝法灌頂初夜

○結縁灌頂三昧耶戒

①東寺灌頂三昧耶戒表白 寛信法務作

二才

(参考)

②觀音院灌頂三昧耶戒表白 故御室御作

二才

イ注記。

③同表白 同御作

四才

イ注記。

④同表白 御室御作

五才

イ注記。

⑤同表白 同御作

七才

イ注記。啓白諸句集⁽²⁾567行。

⑥同表白 敦経擬作

九才

本朝文集卷第六十二。

⑦尊勝寺灌頂表白 匡房卿作

十才

イ注記。本朝統文粹卷第十二。長治元年(一一〇四)三月二十四日(本朝統文粹卷第十二の年紀)。

○結縁灌頂初夜

⑧東寺灌頂初夜表白 寛信法務作

十一才

⑨觀音院灌頂初夜表白 故御室御作

十二才

⑩同表白 御室御作

十三才

⑪同表白 同御作

十四才

○伝法灌頂初夜

⑫御室御灌頂初夜表白 故御室御作

十五才

イ注記。仁安三年(一一八六)四月十二日(仁和寺御伝)⁽⁴⁾。

⑬宮御灌頂初夜表白 御室御作

十七才

イ注記。啓白諸句集419行。元暦元年(一一八四)十一月

五日(仁和寺相承秘記)⁽⁵⁾。

⑭仁性律師伝法灌頂初夜表白 故御室御作

⑮寛紹伝法灌頂初夜表白 寛信法務作

(2)表白集第四塔供養付泥塔 鎮壇 堂供養

○塔供養付泥塔

①院御塔供養表白 敦周擬作

②塔供養表白 施主并作者可尋之

③故御室八万四千基泥塔供養表白 勝賢僧正作
于時僧都

○堂供養

④鳥羽證金剛院供養表白 中御室作

⑤鳥羽炎魔天堂供養表白 寛信法務作

⑥上西門院北山三昧堂供養表白 故御室御作

(付) 仏釈所褒

⑦蓮華心院供養表白 御室御作

⑧花蘭左大臣堂供養表白 寛信法務作

⑨美作守頭能法性寺堂供養表白 (任之) 同人作

十八才
イ注記。仁安三年(一一六八)二月十一日(御室相承記)⁽⁶⁾。
二十才
高山寺本表白集⁽⁷⁾。保延六年(一一四〇)五月七日(高山寺本表白集の研究)⁽⁸⁾。

二才
本朝文集卷第六十二。⁽⁹⁾

四才
仁安四年(一一六九)年二月二十二日(御室相承記)。

六才
康和三年(一一〇二)三月二十九日(御室相承記)。

七才
醍醐寺本表白集⁽¹⁰⁾。

八才

十才
表白御草⁽¹¹⁾。承安四年(一一七四)二月二十三日(寛書)
建長六年書写 覚洞院法印親快筆 「表白御草」⁽¹²⁾。

十二才
醍醐寺本表白集⁽²⁾。

十三才
醍醐寺本表白集⁽²⁵⁾。

⑩奉為故二条院香隆寺御堂供養表白 敦經擬作 十四才 本朝文集卷第六十二。仁安元年(一一六六)七月二十六日(百鍊抄第七)。

⑪故御室奉為高野御室高野御堂供養表白 敦周擬作 十六才 本朝文集卷第六十二。仁平四年(一一五四)十二月六日(兵範記)。

⑫美作前司為亡女雲林院堂供養表白 寛信法務作 十八才

○鎮壇

⑬皇太宮興福寺御堂鎮壇表白 同人作 十八才 康治二年(一一四三)十二月二十日(本朝世紀第二十七)。

(3)表白集第六修法 護摩 供養法

○修法

①後七日御修法表白 寛信法務作 二才 醍醐寺本表白集(35)・高山寺本表白集(67)。

②中宮孔雀經御修法表白 御座御祈 日触御祈 御室御擬作 二才 建久六年(一一九五)(本文末尾に年紀有り)。

③上皇仁王經御修法表白 敦周擬作 御座御祈 四才

④中宮薬師御修法表白 明宗擬作 五才

○供養法

⑤東寺灌頂後朝供養法表白 寛信法務為 源運作之 六才 高山寺本表白集(10)。保延四年(一一三八)十月二十九日(高山寺本表白集の研究)。

⑥觀音院灌頂後朝供養法表白 敦綱擬作 六才

⑦同表白 賢清作 七才

⑧南御室仏名後朝供養法表白 敦光為
範寛作之

八才

⑨同表白 匡隆為行任
作之

九才

⑩同表白 敦経擬作

十才

⑪同表白 賢清作

十一才

⑫八条院舍利供養表白 故御室御作

十二才

⑬聖鏤金剛界初行表白 自作

十三才

承安元年(一二七二)八月二十五日(大乘院寺社雜事記)¹⁶。

本書は、先に述べた如く零本であるので、全体の構成については詳細は不明とする他はないが、これによってその概観は凡そ知ることが出来る。すなわち、今、(1)表白集第一に注目すれば、これは内題からも知られるように、灌頂に関する法会の表白文を類聚したものと考えられ、そこに集められた十五篇の表白文を「結縁灌頂三昧耶戒」―七篇①～⑦、「結縁灌頂初夜」―四篇⑧～⑩、「伝法灌頂初夜」―四篇⑫～⑬の三つに分類していることが知られる。更に、③～⑥、⑩⑪は「同表白」とあって、同類のものをまとめて配列していることがわかる。

⑩⑪は「同表白」とあって、同類のものをまとめて配列していることがわかる。¹⁷
現存最古の表白集の写本としてよく知られている醍醐寺本表白集や高山寺本表白集の場合、部分的に同類のものを集めようとした痕跡は認められるものの、全体としては分類基準が不明確であり、雑とした観があることは否めないのに対して、本書の場合、この第一のみならず、第四・第六もおのおの法会の種別に基く部類がなされており、その中を、更に下位分類して、特に同類のものは、これをまとめて配列するといった、極めて整然とした構成を有していることが知られるのである。¹⁹

又、右の中、最も古い表白文は、(2)④鳥羽證金剛院供養表白―康和三年(一一〇二)であり、最も新しい作は、年紀の示された(3)②中宮孔雀経御修法表白―建久六年(一一九五)であって、現段階で考証し得たものに限っても、この間約百

年ものひらきがあることが知られる。

この点に於いても、一一三〇年—一四七七年頃に集中している醍醐寺本や高山寺本とは異なり、本書は、時代的にも広範にわたって表白文を類聚・集成しようとした跡が窺われるのである。

四、所収表白の作者について

本書所収の表白文には、第四の②「塔供養表白 施主并作者可尋之」を除いて、すべて作者の名が明記されている。今、素姓のよくわからない明宗・聖鏝(各一篇)を除き、これらの人達を僧俗の別に分けて、収録篇数の多い順に掲げると次の如くなる。(括弧内の数字は収録篇数)

(1) 僧侶

寛信法務(10) 故御室(7) 御室(7) 賢清(2) 中御室(1) 勝賢(1)

(2) 儒者

敦経(3) 敦周(3) 敦光(1) 敦綱(1) 匡房(1) 匡隆(1)

このように、僧侶以外に儒者の名が多く見出せることも本書の重要な特色の一つであると思われる。

(1)では、故御室・御室・賢清・中御室(覚行法親王)といった仁和寺関係の僧の名が多く見える。本書第四③「故御室八万四千基泥塔供養表白」勝賢僧正作
于時僧都は、「御室相承記五紫金臺寺御室」の、

○於紫金臺寺、被供養八万四千基泥塔事、

〔四月八日改元嘉〕

仁安四年二月廿二日己酉、有此事、御導師勝憲僧都、請僧、六口

とある記事に相当すると考えられるので、右の「故御室」なる人物は、五代の仁和寺門跡、紫金臺寺御室・覚性法親王⁽²¹⁾であることが知られる。又、「御室」は、本書第六の②「中宮孔雀経御修法表白」の末尾に、

○建久六年中宮御産時御室為用意有御擬作而宮令修御仍不被用此御草

と記されていることより、建久六年の時点で仁和寺御室であった人物を「仁和寺御伝」にもとめると、第六代の喜多院御室・守覚法親王⁽²²⁾であることが判明する。(従って、右の引用文の「宮」なる人物は、同じく「仁和寺御伝」の記事より、次代の後高野御室・道法法親王⁽²³⁾であることが知られる。)

他に、小野方の勸修寺法務寛信や醍醐寺僧勝賢の名も見えるが、寛信は、「追記」に、

○但外儀法則之事者。醍醐流ニハ。用ニ寛東院僧正記。勸修寺用ニ寛信法務記。 (群書類従・釈家部)

と記されており、守覚法親王が勸修寺の外儀法則を知る上で、彼の書を尊重していたらしいことがわかる。又、勝賢も、醍醐寺蔵本の「伝法灌頂師資相承血脉」に、

8才・三宝院流

蒸通・付法九人
権僧正勝賢——「号御流」・守覚「重」北院御室 (醍醐寺文化財研究所「研究紀要」第一号〈昭和53年・法蔵館〉)

とあり、守覚法親王の師であることが知られるのであって、小野流の僧とは言え、二人共守覚法親王と何らかの交渉のあったらしいことが、右の記事から窺われるのである。

一方、(2)では、式家(敦経・敦周・敦光・敦綱)と大江家(匡房・匡隆)の作が拾われる。

守覚の撰と伝えられる龍門文庫蔵「啓白諸句集」は、啓白文を作る参考書として多くの作文例を類聚したものであるが、計二十六名の作者中に、匡隆を除く右の五人の名が見える。そして、中でも、式家の敦経・敦周は、

○御本云「承安五年二月十三日晡時奉授」禪定大王了李部少卿敦経同談義理又「賢清闍梨侍座時也雨已止雲未晴矣」

御史中丞兼翰林学士敦周」 (小林芳規「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓詁の国語史的研究」〈昭和42年・東京大学出版会〉附録・I漢籍

古点本奥書識語集、性靈集十帖 醍醐寺 (巻第六)、傍線は私に付した)

右の記載などから、性靈集の加点を通して、守覚法親王と直接交渉のあったことが知られるのである。

以上のことから、仁和寺僧以外の、儒者にしても、小野流の僧侶にしても、当時既に故人となっていた寛信・敦光・匡房も含めて、そのほとんどが守覚法親王と何らかのかかわりを持っていたという注目すべき事実が浮び上がってくるのである。この項のはじめに、筆者は、本表白集の特色として儒者の作が僧侶の作に混って収録されていることを指摘しておいたが、本書の如き文献の成立には、山崎誠氏の説かれるように、⁽²⁴⁾守覚が主催した仁和寺に於ける真言宗の宿老と博士家の鴻儒達との學術の交換、即ち真俗の交流という文化的な背景が存していたものと想像されてくるのである。従来説かれてきたように、⁽²⁵⁾平安時代の中・後期には、専ら儒者がその任に当たっていた表白文の作成を、院政期に入ると一般の僧侶も自ら行うようになったという事実は、そのこと自体、真俗の交流を背景に想定させるものではある。しかし、本書は、その実情をより具体的に伝えてくれているものであると思うのである。

ともかく、本書は零本であって、その成立の時期や編者についても、今迄に述べてきたことや東寺旧蔵であるらしいことなどを考え合わせて、⁽²⁶⁾建久六年（年紀最新）以降鎌倉中期（書写時期）以前に、真言宗の僧侶（東寺・仁和寺関係か）⁽²⁷⁾によつて編纂されたものであろうということ以外は、今は未詳とせざるを得ない。しかし、ここに縷述した本書の特色と思しき諸点については、今後、表白集編纂の歴史を考える上で、又、表白文体の歴史を考える上で重要な意味を持つことになると思われるのである。

注

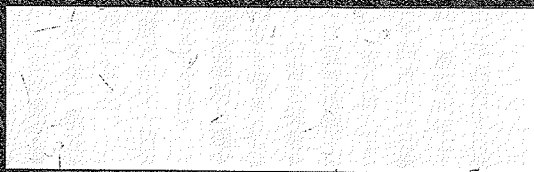
- (1) 第四の十三〜十九丁裏と第六の一〜十四丁裏に文書有り、中に仁和寺・興福寺関係のものを含むか（橋本初子氏の御教示による）。
- (2) 川瀬一馬『阪本龍門文庫覆製叢刊十二』（昭和49年・便利堂）。昭和六十一年七月二十四・二十五日筆者原本実見。
- (3) 新訂増補国史大系。
- (4) 奈良国立文化財研究所史料第六冊『仁和寺史料寺誌編二』（昭和42年・吉川弘文館）。
- (5) 奈良国立文化財研究所史料第三冊『仁和寺史料寺誌編一』（昭和39年・吉川弘文館）。

- (6) 注(5) 文献。
- (7) 高山寺資料叢書第二冊『高山寺本古往来 表白集』(昭和52年・東京大学出版会)。
- (8) 築島裕注(7) 文献。
- (9) 新訂増補国史大系。
- (10) 醍醐寺文化財研究所『研究紀要』(昭和59年・法蔵館)。
- (11) 『国書逸文研究』第十六号(昭和60年12月)。
- (12) 山崎誠注(11) 文献。
- (13) 新訂増補国史大系、「奉_レ為_二条院_一。於_レ広隆寺_一供_レ養一堂_一。」(仁安元年七月二十六日)。
- (14) 増補史料大成、「御室大事御之由、京中風聞、自女院有御使、申刻已令崩逝了。」(仁平三年十二月六日)。本書の本文に、「相当先師二品法親王^(高野御室)一周之御忌」(十六才)とあり。
- (15) 新訂増補国史大系、「皇太后宮興福寺内御塔供養也。」(康治二年十二月二十日)。本書の本文に、「爰国王皇后卜吉土於興福寺立三重之塔婆」(十九才)とあり。
- (16) 辻善之助編『大乘院寺社雜事記』四卷(昭和39年・角川書店)、「美福門女院之姫宮八条女院相次命恭敬供養給而大皇太后宮權大夫俊盛・師家奉請、承安元年八月廿五日奉請之。」(文正元年閏二月四日)。
- (17) 築島裕「醍醐寺蔵本表白集について」(注(10) 文献)に、「その書写年代は鎌倉初期を下らず、(中略)現存するこの種の書の内、最も古い写本と考へられる。」と説かれている。
- (18) 注(7) 文献。書写は、醍醐寺本よりも若干下ると説かれる(築島裕注(17) 文献)。
- (19) 「善本解題99表白集」(京都府古文書緊急調査報告「東寺観智院金剛蔵聖教の概要」昭和61年3月)に、「きわめて多数の表白集を収集・部類したもので、他に類を見ないものである。もと十二帖あったと思われるが、第四を欠いている。所収表白は全てで二一八篇に及び、それらを、第一(結縁灌頂三昧耶戒・同初夜・伝法灌頂初夜)∴〈中略〉第六(修法・護摩・供養法)∴〈中略〉の如くに部類している」(二一八頁)とあり、第一・第六の部類が本書と全く一致している点、注目される。原本調査が待たれるところであるが、もし、この東寺本が本書の異本の如きものであるならば、本書の規模は、元は相当大きなものであったことになる。

- (20) 本書第四③の「勝賢」と『御室相承記』の「勝憲」では、○印の如く、字が異なっている。しかし、『野沢血脈集』巻第二(真言宗全書三九)によれば、「本名=勝憲。配流故替=用賢字。」(第二十二勝賢)とあって、同一人物であることが知られる。
- (21) 鳥羽院第五子、大治四年閏七月二十日降誕、久安三年四月十日第四代高野御室覚法親王より灌頂を受け、仁平三年十二月同法親王薨去の後を承けて仁和寺の寺務に補せられ、嘉応元年十二月十一日、四十一歳を以て薨去(仁和寺御伝)など。
- (22) 後白河院第二子、久安六年三月四日降誕、仁安三年四月十二日第五代紫金臺寺御室覚性法親王より灌頂を受け、翌年同法親王薨去の後を承けて仁和寺の寺務に補せられ、建仁二年八月二十五日、五十三歳を以て薨去(仁和寺御伝)など。「親王は多能な御方であつて御著作も少くない。仏道に於ては覚性法親王や覚成僧正、勝賢僧正、源運僧正等について広沢小野両流の奥秘を究め、沢見鈔、沢鈔、野月鈔、野沢鈔其他多くの書を編著せられたが、声明や管絃の道にも通ぜられ之に関する御著述もあり、御筆跡も美しく殊に梵字に巧であつた。和歌を嗜まれた事も勿論であつて、毎月風雅の士を召して歌会を催され(左記の序)、御作の撰集に入つた者も少からず、北院御室御集と題する家集も今に残つて居る。」(橋本進吉「法橋頭昭の著書と守覚法親王」・『史学雑誌』第三十一編第三号、大正9年3月)
- (23) 後白河院第八子、仁安元年十一月十三日降誕、元暦元年十一月五日第六代喜多院御室守覚法親王より灌頂を受け、建久九年八月五日に仁和寺の寺務に補せられる(仁和寺御伝)など。
- (24) 「真俗交談記考——仁和寺文苑の一考察——」(『国語と国文学』第五十八巻一号、昭和56年1月)。
- (25) 山岸徳平「澄憲とその作品——文集を中心として——」(山岸徳平著作集I『日本漢文学研究』所収、昭和46年・有精堂)。築島裕注(7)文獻。
- (26) 橋本初子氏より、私信にて「本書を含む京都女子大学の聖教群(二十七点)には、いずれもその奥書等に東寺々僧によつて書写伝領がなされた旨記されたものばかりであり、東寺以外の所に伝来したとは考えられません。」との御教示を賜わつた。
- (27) ここで述べた、所収表白の作者の多くが仁和寺僧であり、例外となる儒者や小野方の僧も、守覚法親王と何らかの交渉を持つていたという事実を踏まえての推論である。当時の、菩提院行遍の活躍や東寺供僧の多くが仁和寺僧であつたこと(網野善彦『中世東寺と東寺領荘園』昭和53年・東京大学出版会)などを考えると、仁和寺僧の編した書物が東寺に伝わつていても自然なことではないと思われる。

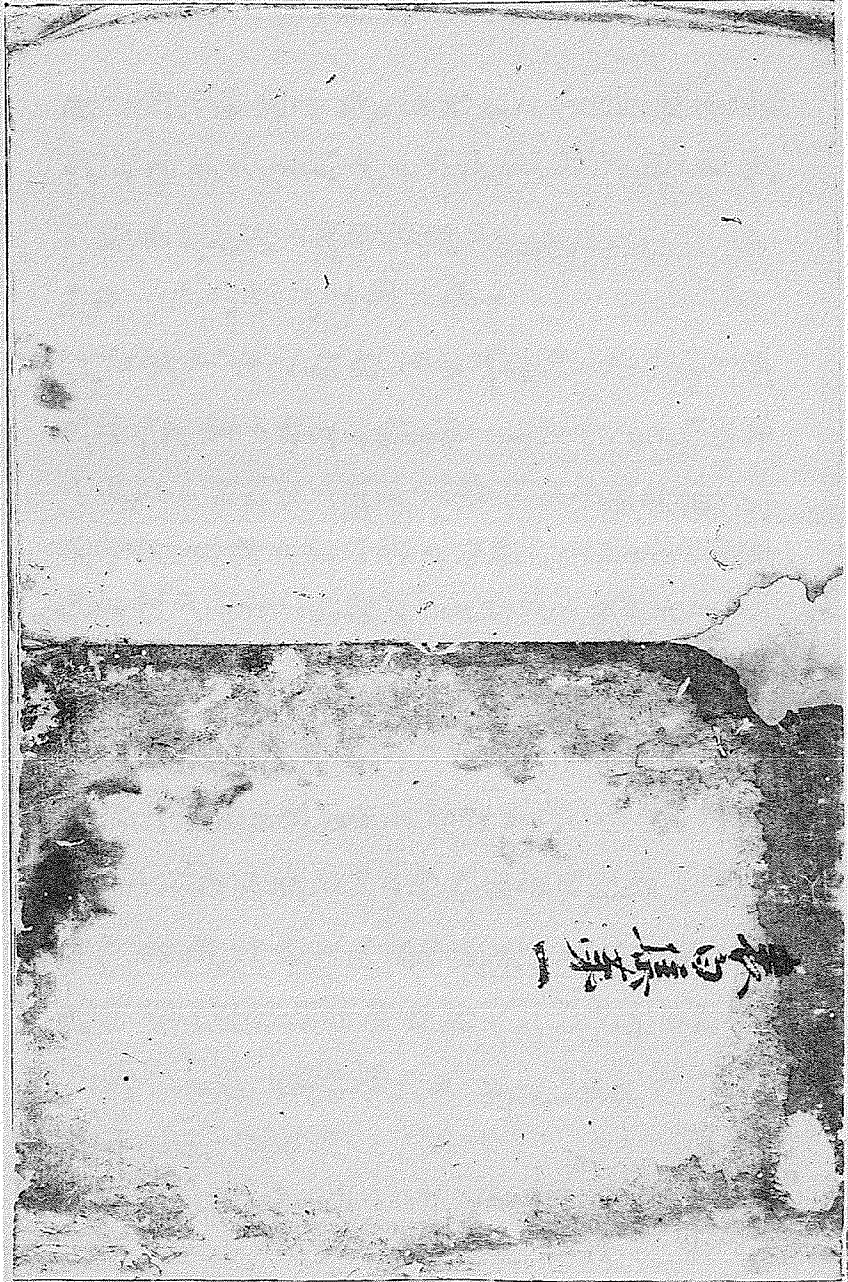
〔付記〕

本稿は、昭和六十一年度広島大学国語国文学会秋季研究集會に於いて、口頭発表したものを基に纏めたものである。席上、終始御指導載いた小林芳規先生をはじめ、神鳥武彦先生、山崎桂子・原卓志の両氏より貴重な御教示を賜わった。又、書誌等については、橋本初子氏より多くのことをお教え載いた。記して深謝申し上げる次第である。



K 186
3
199
1





京都女子大学蔵表紙白集解説並びに影印

二才 (フ墨ナシ)

表曰集第一條條讀頂三昧戒 日初夜

結條讀頂三昧戒

東寺讀頂三昧戒表寬信法華作



支條條讀頂行法者雖解難入之妙門擇其機名而

秘教尊取上之重濁起十地而尤高故值過罪一世

二亡之條體因是百劫之勤亦如也過過者利益也則消

衆罪之露僅因者即極廣覺普淨戒之珠是以集成

場之辭願者皆是究竟之損攝入聖壇之衆者

殊勝之善人也莫先皇始會返三百之星霜大

對直薰灰信字檀類依云親成年之作百年

改化等閉道感未誇三壽之俗隆抑金對果止不尊此

之破質言豎行寺之床率宿禁首才頻後擲

敷且世惡童扣且注措條漢京今乞戒村關象

邪智是妙子三請難上吻又滿亂言如流公道

明哲所九卷說先達所傳

觀音院讀頂三昧戒表白 改淨書所作

支津卷言之重性來之也帝覆皆畫城月來

而氣不煩細尋梵聖有於浪日金對三殿凌差霜

之石與訪舊先從皇朝公法行傳均臺之中自谷
 以匯私子白平一車者未過軌輒終三臺一進行
 浦青龍五執者深湛波浪拍雙圓海挾英靈數
 身將而攝者欽推結緣崖頂者覽玉生微化每
 衆宜樹悟方俊也思身自樂難臨舞投入聖
 時式許式校彼太字敬聖之志粟秘中於大布空廣
 富美仁明淳化甚秘密儂於教王護國寺之知層
 同室重珠風者推崇孔也美富知監大會
 當之監觸者寬弘奇驟翰選而有幾迴具滿者
 悔區春風俯降而展息舊屋新行以露此人也
 佛種昭文鏡良材高材後集群書講解觀音度
 符戒毀戒廣秀信條普門寔非三洲五劫流弊
 願止來个化良緣雜語百五障雜竹重衣繫木
 如珠誰留障字要密盡訂廢前運宜雜障雜羅
 衲二十口出拓洞而延請樂銀黃二人移林路如恒
 率一環抵玉響唐鐘相和柝檀香自濟集家傳法
 會歸望望其不生乎方今寶物皆主早屑千載
 專專博三統也隆周德王靈雅寄來文王須

孫裁當今聖主（初齡）是上皇（幼子也）古奈
 例協佳獻或並則禁闈（禁闈）無為隸洪（隸洪）實於震陸射山有樂
 伴仙弄於松石南（南）而寺稱（地）地過佛自（弄）手
 編（八）心（一）卿更誇齊風（述）射於屋射佛子頌（頌）
 下皇（柱）寺（一）殿雖未盡（上）有噴哲（一）跡畫（畫）機
 始（一）始（一）茲時幸得（一）軍唱（一）淨（一）作（一）願（一）理（一）前（一）法
 以汝及證明伏（一）東會聖眾（一）之音哀終（一）教（一）白

詞卷白

（詞）

方今聖皇陛下（一）東斷（一）而釋（一）天五帝（一）說（一）區（一）詞（一）

在（一）機（一）而（一）毛（一）海（一）三皇（一）名（一）聲（一）終（一）太（一）從（一）聖（一）華（一）之（一）聖
 展（一）自（一）致（一）半（一）半（一）勿（一）踐（一）畫（一）乳（一）坤（一）醜（一）濕（一）就（一）目（一）暗（一）成（一）靡
 風（一）有（一）集（一）祥（一）幻（一）冲（一）自（一）征（一）未（一）亦（一）畫（一）齊（一）方（一）惟（一）子（一）自
 昌（一）運（一）而（一）隆（一）傑（一）推（一）新（一）與（一）若（一）八（一）挽（一）關（一）以（一）者（一）臨（一）若（一）漸（一）着（一）雨
 威（一）貫（一）秋（一）霜（一）種（一）手（一）葉（一）而（一）樞（一）鴻（一）塞（一）雅（一）集（一）化（一）於（一）辰（一）盡
 酌（一）檻（一）狀（一）而（一）助（一）龍（一）面（一）獨（一）言（一）法（一）於（一）東（一）漸（一）流（一）事（一）我（一）因（一）帝
 戰（一）常（一）千（一）過（一）佈（一）法（一）佳（一）辰（一）飲（一）據（一）結（一）緣（一）爾（一）備（一）大（一）實（一）者
 道（一）皇（一）高（一）德（一）道（一）傷（一）便是（一）天（一）寶（一）圖（一）之（一）劃（一）如（一）春（一）香（一）烟
 設（一）梵（一）席（一）寧（一）非（一）東（一）寺（一）高（一）院（一）之（一）蕭（一）儀（一）如（一）來（一）符（一）泛（一）此

而起高祖一次一父職志如身身燬燬傳傳臺臺畏畏區區步
 佳佳壇壇波波踏踏霞霞靴靴鴻鴻靴靴亞亞齊齊齊齊歸歸秦秦律律齊齊
 自自公公密密畫畫而而語語出出不不知知其其高高轉轉後後正正立立一一層層
 匪匪石石撥撥而而行行地地不不知知其其額額過過于于流流石石三三千千里里歎歎歲歲
 之之符符雜雜測測愛愛慈慈一一廟廟之之乳乳難難並並九九五五至至
 思思研研會會集集於於香香門門外外陰陰九九億億人人皆皆集集杖杖
 戒戒珠珠於於因因海海晚晚浪浪盡盡之之同同亡亡塵塵恰恰未未而而無無罪罪
 乘乘夜夜遠遠行行一一帶帶鼓鼓蘭蘭同同而而有有渡渡音音斯斯燈燈若若三三
 大大信信然然立立地地言言明明一一而而看看靈靈雷雷而而望望者者百百之之流流
 照照萬萬竿竿二二昧昧秋秋天天飛飛清清波波陳陳玉玉難難豈豈徒徒運運信信
 於於一一宗宗一一願願歎歎朋朋明明難難尊尊佛佛徒徒豈豈復復於於百百濟濟
 月月我我若若機機緣緣轉轉東東一一引引摩摩佛佛子子一一行行移移
 而而失失一一威威儀儀簡簡重重一一之之難難不不隨隨喜喜坐坐則則瑞瑞壽壽
 金金心心一一喜喜動動天天一一德德暖暖矣矣于于長長紫紫雲雲高高野野輝輝
 洞洞見見地地一一氣氣白白地地乎乎又又嬉嬉油油絲絲米米粉粉拾拾餅餅冰冰雪雪
 一一剪剪華華城城霞霞野野在在近近野野而而落落一一俱俱矣矣
 同同表表一一斬斬新新作作
 夫夫結結緣緣灌灌頂頂一一其其善善大大卦卦法法以以薄薄伽伽一一焉焉

五才 (ウラ墨ナシ)

吾巧也隨行無用觀門神力行振妙
 鬼也任性欲而沉座嚴標許廣及行擇
 擯撥捨漸發解滄通直即流絕地佛
 地靈斯隨類應物音便無之教音樂之秘
 術者欲是以巨品天寶唐達客壺而依唐
 宗不朝弘仁奉排范閣而繼曠端自法注
 式之規量漸負於高院之降寒煖概覺
 紫回秦陷吳平清州既舊驟跡還子
 二代皇家尊崇數珠忽斬侯為臣河系

未豈伏推金上下推毛之數御覽之體之六之
 在如於而棄神態同軒奉御齊指奉賢朝如庶
 葉悴且禪周仁禁竹露暖盡風刺留晴劍
 寒卓烟閑速去連詢既方今冬暮月
 中句空離者相應設秘密大會
 法皇盤出玉之觀仙澤外車始和庭又之念仙
 院共位儀畢侍敬禮發露膽成同將讀誦
 勤看說響音流者有廣六之群片移龍
 此於象網外運者舍衛九儀庶類文木

於蓬宮之序之博善故奉賢聖上金輪儼威
 歸四州而遠轉瑞圖格連之五岳而不搖如之湯湯
 禪觀之水之清波相如難兼城造之如金柱
 石經華院宮所者流造之精皇親家今落
 屏一因履辰神宴勃動如鐘斷之鎔十官晉
 察紛真特於松筠之節室請手較有量獲
 端銅輝輝屏星檢言寶宴之夜玄象心度武備來
 戰馬放花山之風徑治氣調樂崇陰之俗化破
 蒸之衆主離有之迷儉教內

同表 用非

志式觀浩綠灌頂之元輝 磨脫九入聖之佳品
 尊迷生於香門手輪圓具足之貴相 敬為群眼去
 清泉通金對豎眼之明 嗟嗟內證博蒼之豈非
 知盤備不指敢許者為圓汗之廣緣也 上宗信解
 焚樂不釋生指不輪柳漸慈內化之有便也 月
 前照誰家瀟勝因丹車所乘 美卿宮景 蘇侯
 之帝陛下 幼當天統少守神 為政道 論與協佳
 飲進歌 聖願之聲滿 同連津 洽與珠 俗踰跡

懋博之貞連（後醍醐天皇）醒（醒）宰（宰）之葵輔（葵輔）所（所）言（言）非（非）實（實）直（直）德（德）
 趣（趣）春（春）之（之）卦（卦）勝（勝）也（也）豈（豈）果（果）忘（忘）其（其）心（心）憂（憂）處（處）冬（冬）為（為）律（律）昔（昔）
 昭（昭）室（室）則（則）抽（抽）展（展）歎（歎）之（之）疑（疑）襟（襟）於（於）質（質）重（重）之（之）真（真）業（業）上（上）東（東）
 諸（諸）天（天）善（善）照（照）臨（臨）玉（玉）階（階）並（並）光（光）

圖（圖）母（母）仙（仙）院（院）東（東）隨（隨）香（香）燭（燭）華（華）車（車）轉（轉）小（小）鏡（鏡）履（履）何（何）帶（帶）
 衣（衣）衣（衣）信（信）儀（儀）粉（粉）澤（澤）之（之）趣（趣）圓（圓）行（行）龍（龍）鏡（鏡）窗（窗）以（以）貨（貨）管（管）
 衆（衆）出（出）緬（緬）阿（阿）之（之）序（序）夏（夏）臆（臆）行（行）龍（龍）鏡（鏡）窗（窗）以（以）貨（貨）管（管）
 鳳城（鳳城）西（西）殿（殿）空（空）徒（徒）望（望）風（風）水（水）亦（亦）意（意）烟（烟）之（之）裏（裏）已（已）裁（裁）

今令

首（首）梁（梁）市（市）西（西）湘（湘）宮（宮）之（之）明（明）尊（尊）集（集）危（危）義（義）氣（氣）道（道）之（之）者（者）八（八）三（三）餘（餘）

聖（聖）之（之）儲（儲）林（林）閣（閣）乎（乎）設（設）曆（曆）送（送）濟（濟）意（意）難（難）行（行）之（之）者（者）幾（幾）十（十）
 許（許）車（車）波（波）頭（頭）此（此）密（密）格（格）清（清）乳（乳）沃（沃）你（你）願（願）龍（龍）而（而）保（保）你（你）淨（淨）
 却（却）之（之）風（風）區（區）朝（朝）鳳（鳳）巢（巢）歎（歎）祥（祥）禁（禁）橋（橋）之（之）陰（陰）鎮（鎮）靜（靜）始（始）身（身）驅（驅）
 尉（尉）凍（凍）隨（隨）為（為）郭（郭）老（老）之（之）味（味）充（充）門（門）壁（壁）砌（砌）畫（畫）翼（翼）獻（獻）殿（殿）長（長）生（生）
 於（於）天（天）枝（枝）帝（帝）榮（榮）之（之）園（園）久（久）芳（芳）煙（煙）錄（錄）補（補）寒（寒）之（之）商（商）推（推）禮（禮）
 赤（赤）縣（縣）之（之）十（十）二（二）州（州）樂（樂）鳴（鳴）挂（挂）鳥（鳥）高（高）枕（枕）紫（紫）葉（葉）塞（塞）之（之）三（三）十（十）里（里）

八才（ウラ墨ナク）

解鷹トウ或トウ与トウ乘トウ于トウ早トウ游トウ之トウ不至トウ于トウ豊トウ稔トウ之トウ蓄トウ之トウ窮トウ利トウ也トウ

恩備トウ泰トウ應トウ 初トウ要トウ授トウ備トウ巾トウ靴トウ臨トウ佛トウ臨トウ法トウ亦トウ先トウ跡トウ刻トウ

尾トウ易トウ生トウ願トウ化トウ林トウ以トウ滴トウ原トウ願トウ孫トウ孫トウ皮トウ還トウ滑トウ滑トウ之トウ氣トウ斷トウ事トウ

得具述教白

同表白 敬後極作

夫トウ密トウ教トウ之トウ法トウ歸トウ歸トウ聖トウ方トウ對トウ聖トウ頭トウ說トウ法トウ之トウ首トウ極トウ聖トウ言トウ

末トウ宣トウ龍トウ極トウ坐トウ之トウ時トウ啓トウ鑄トウ塔トウ而トウ始トウ弘トウ公トウ采トウ高トウ相トウ

養トウ傳トウ於トウ聖トウ於トウ西トウ天トウ之トウ意トウ者トウ之トウ純トウ滬トウ留トウ而トウ未トウ來トウ斷トウ之トウ

水トウ音トウ機トウ後トウ者トウ不トウ殊トウ許トウ頃トウ證トウ保トウ位トウ空トウ盡トウ之トウ欲トウ非トウ著トウ

善トウ者トウ不トウ姑トウ知トウ自トウ覺トウ所トウ在トウ境トウ也トウ之トウ故トウ聖トウ談トウ持トウ淨トウ之トウ

方便トウ入トウ心トウ軍トウ於トウ空トウ場トウ之トウ下トウ壇トウ幽トウ深トウ之トウ善トウ運トウ轉トウ學トウ類トウ也トウ

海トウ田トウ之トウ中トウ留トウ未トウ男トウ女トウ之トウ運トウ步トウ也トウ先トウ需トウ雨トウ而トウ需トウ雨トウ而トウ風トウ來トウ使トウ

舊トウ甲トウ之トウ後トウ曠トウ也トウ非トウ能トウ聖トウ之トウ聖トウ集トウ者トウ水トウ滬トウ自トウ結トウ使トウ感トウ

慶トウ承トウ消トウ戒トウ香トウ意トウ心トウ成トウ也トウ橫トウ荒トウ業トウ思トウ教トウ誠トウ是トウ利トウ益トウ

衆トウ生トウ之トウ大トウ會トウ鎮トウ護トウ國トウ家トウ之トウ功トウ能トウ也トウ抑トウ全トウ附トウ伊トウ子トウ三トウ

空トウ之トウ法トウ水トウ推トウ深トウ寧トウ決トウ音トウ莫トウ之トウ疑トウ雨トウ部トウ之トウ照トウ殊トウ難トウ

蓋トウ法トウ指トウ周トウ龍トウ之トウ聖トウ環トウ不トウ充トウ下トウ之トウ愚トウ質トウ難トウ厚トウ許トウ子トウ之トウ

萬トウ聖トウ作トウ願トウ理トウ有トウ法トウ身トウ海トウ會トウ醫トウ衆トウ早トウ喬トウ聖トウ坐トウ地トウ

果啓教目

奪勝奪法頌表曰 皇倉卿作

夫推教實教之義也羅也藉也於秘法散之月二
 意也風氣也虛頂有尺自在文成直也此儀大實也
 玉至也實也之耳也陸也普陸海倉十奇圍繞言上世尊
 一時授職也相好之無邊則眼障盡陸臣之風月
 論善根之有限也外國通法皇之煙龍也卅二位
 女士承光波榮三兮三也石如也小業行也觀其意
 一高誠是真寶取漢言語也已教孝之故教也
 亂要敬誠養也暮月也之清陸於清殿修德德
 灌頂也二品法朝王也為人門也聖耶也一情徑也午非
 口為讚衆也山公障患也送骨鞠福也寸也皆此也枕
 密室也車燈也兮也今却便為也司日長死也牙室也不
 敬政賜天人也衣盡石谷也水為塵也令此行傳
 右不朽者是通華也僅行也鸞旗也頂也卽八十車
 千古斷難致也一日黃梅檀種子也。豈非三五
 之真千願也。此刀德也先發神誠也高也考也說也指也據
 賊乞恭讓也惟也廢也受也法也未也則果也處也先帝也就

日首、若此堪息之境、靜真如、宮禪定、淨星類、
精山、月桂、入懸、兩浮、晴星、木居、老門、落蓮

早用西五

金輪、第一、三、之、他、於、茶、天、所、後、百、迴、所、
舞、介、佛、宜、添、長、秋、之、如、竹、南、瑞、觀、水、湯、之、后、

大橋、獻、茅、窠、出、西、林、松、栢、常、茂、推、州、推、皇、

之、地、務、露、音、俊、七、道、玄、寄、月、西、順、時、銅、雀、樓、

聲、普、天、辛、壬、丹、素、于、區、唯、重、譯、乃、是、不、

亂、平、音、聖、畫、海、元、盡、象、音、後、訂、軍、音、傳、

時眺矣

結縁、頂、初、夜

東寺、頂、初、夜、表、白

寛信、律師、作

文、累、年、受、戒、行、三、業、淨、流、障、舍、排、林、密、門、

下、歡、入、道、頂、壇、場、依、懶、奉、望、之、卷、跌、踏、

物、之、行、法、唱、羅、錢、請、歡、敬、尊、件、陀、羅、東、密、

佛、依、舊、頂、者、入、礼、界、地、十、三、舍、列、星、圓、計、稱、行、

八、圓、取、只、並、月、梭、花、之、像、佛、叮、結、者、在、高、

刹蓋瀑水受明所注者皆一世之塵垢異乎
具博之心上用入棄之蓮花父母所望之月得備
三朝之善根倍獲三衆而善寶深信願海會
諸尊殊照二頂之信場各成一古之善願

觀高院灌頂物夜表坊間書作

文德緣灌頂之行者直出通場之軌祀也流篇
者不知能忘之者區望極則自利增爐十如十
去之極堅則利他輒行乎苦善女之體同引
細素如澗智水生身即達涅槃又集寶珠和

密壇人官即自紅宮之足觀梵完之白苑披
而誠有德之佛信靖踏八音之一葉器而新言
如之死根音妙莊嚴之訓佛舍音尊依佛階
眼之致也今德儀衆之文字與夫區起龍猛
龍智之私區彼者應化之權說之迦羅樹之
亂胡偏遠此者皆併之膏浩也且如策之覺
信誓窮德付言之儀又謂軒航之聖名國為
儀佛切人為膏服者欲生則蘭威月靜百邦作
其之松門燈等三毛健其榮矣

同表白訂書作

蓋因真匠造漢化機奇，到菴嚴園，燒香
 剛過清符奇，測柱圓海，波若離大蓮花
 心，雁用字迴對，公駁，奇謀同，柱石當
 院每牙，恒規依，估係，權原，腐舍，細畫，問
 朱先，汝蘭，闕，司，黨，刑，香，感，障，露，滅，後，華
 皇，用，開，覺，蓋，首，探，乳，取，雲，者，三，千，八，字，學
 至，德，要，道，一，大，綱，今，入，滿，年，禮，者，汝，身，計
 唯，蒙，內，陰，走，地，一，賺，利，真，俗，相，失，此，擬，豈，何，稱
 金，橋，取，一，幼，冲，一，擊，寶，曆，報，格，一，在，旋，機，歌
 二，歌，掩，和，藏，首，於，有，虞，一，王，高，監，監，今，得，良，劍
 於，片，唐，一，鏡，兩，落，院，具，皇，澤，暖，一，具，如，春，柳，飛
 喻，前，冰，附，盤，考，一，虛，月，行，夫，帝，欲，不，歡，竹，著
 千，行，亂，象，部，瑞，香，伏，請，一，六，高，祖，隨，及，證
 明，此，素，分，被，盤，則，龍，為，煙，大，群，方，作，元，首，一
 尊，鴻，素，維，長，智，道，從，詳，翠，一，詠，夏，頂
 法，皇，之，此，復，區，問，月，甚，鎮，視
 心，院，一，移，錦，帳，觀，月，一，宮，推，高，象，海，清

正午和櫻歌目
同表日月所作

原走曰種恩德唯分國日慈惠和家五大權
碩雅異衆生度脫功此天此覆載仁
足黨如輪如環流轉一善欲斯是上祈龍
九五至尊義寶錄之善信中真鴻集之奇
一庶類授下而一有訛治後灌頂一奉業

國日皇帝在少察而踐天位日月伴明暢大
比而燮家雲雨播澤區川易濟澤成舟於
海波連塵音假縱周馬之西岳卓非宮圓環
在謀無羨專啼真一主乃懸輪伽輪救儀
則廣勸與發頓悟之善目所灑者五瓶之水
圓之流塵灯枕者曰蓋燈歷之皇移
較音高代字一排肉厚千官百密臨公我
國家傳空規切艾毒者早引破欲之此
致也情海會之節尊處就
天子之漸頤孔榮位穩從巖厚當終一節

歐力需學教以象數瑞淳化

法皇之下始肇角毒不塞

國外之使仙駕陰教是調也属辰寧人誇凱

樂敬

傳法履履初夜

新室清履履初夜表曰敬言所作

原夫竹書提必實知自心美秋教雖雅在律有信通

金鼎之法忠高名言他而携平潤骨秦之自在殿

埋行高名心也適自非造力持尊持之門既挂欲

宜例法者誰敢以身語意之律筆誰之作事

見之也相身言通力之非力乎得而稱者也意傳

法灌頂者通照傳也受法樂之要路備律之高依

也昔賢行着開職信之頓門也來之大秘密也昂

身律業務速矣大法塔之摩觀生合密雲也

天鼓雷之響悟慧大仙位均法王之一智無難之

月輪照雨徑而智展燦之秋忠會集之天蓋離

一夜楊窠歲園之雜處徒自教善門有疾三

生六十之勞直妙性因海有得三十七智

續瀉散於天壤（流）

宮清灌頂物表（白）

需以巖崑（岳）從焉鑄鑿（覺）者高稀湖（沙）

池從變塵融法水（者）惟亦信與（生）歷知難

團佛散（鳥）自餅（骨）持身（須）信（信）過（良）樂（者）

徒彼音信（五）東行（也）願（流）源（而）涉（雷）雲（道）

覽三藏（而）赴（法）破（積）而入（五）蓋（是）勸（檢）

善者圓求法（謀）應（化）巨（播）權（說）說（亦）容（者）

鳳（究）竟（小）義（實）訣（豈）豈（辨）則（童）支（傳）法（誰）

履（何）捨（聖）行（之）團（簡）建（狹）非（道）直（踏）世（現）法

悟（自）性（中）在（北）之（真）埋（壇）沙（果）德（輪）圓（即）正（顯）

毗（羅）法（界）曼（荼）帝（綯）靈（聚）輻（湊）眩（心）眩（眩）

初（則）慧（眼）報（審）在（莊）嚴（三）觀（以）法（密）密（句）長（城）

致（悟）音（聲）滿（圓）遯（去）妙（用）事（得）宣（盡）新

阿（闍）黎（弥）陀（之）皇（子）鍾（十）音（餘）慶（未）苦（盡）

將（坐）初（玉）葉（種）不（為）貴（豈）樞（機）唐（之）運（本）歎

劇（狀）音（榮）就（者）不（晚）俗（累）列（發）華（之）林（華）感（遇）

後（亦）持（誰）驚（行）鑽（所）高（伏）大（積）塔（塔）塔（塔）

性廣索子化然頌言志越倫了解應乎中
 明博達之智因物難不謂釋之龍兮誰不謂
 也苑之琳瑯兮今壽皇之威靈兮天擇相應
 一曜宿麥雨歸之即蘭本有之鏡葉忽開也
 天樹玉盤兮極煩地木根之繫汁實應膝滿
 月之億箭大射世尊佛道是青雅而培也
 表靈金堂為皇子之照梁場然白馬而青煙相步
 料識一字之善亦隨壽命復有三因之高
 御衛誰圓時也則侍壽域於他之鑿鑿也
 西水垂垂靈藥加真於居廣之代晉傳而
 天鑄路之隨塵初驗存敷備痛少之感業於
 在文卑能充期作愚儒逐素魄為玉行維
 歡門案之繼臨而來臨而願九才猶迎慈謙之
 反倚唯指原顏不能所敬教白
 二律律師守法灌頂初覆美白故請宣律也
 夫天知灌頂之法其義在矣然未自證
 善托毗面維法表檀子早者徒觀魚大
 輪轉之智中阿闍梨行心之花甚至密唯德高

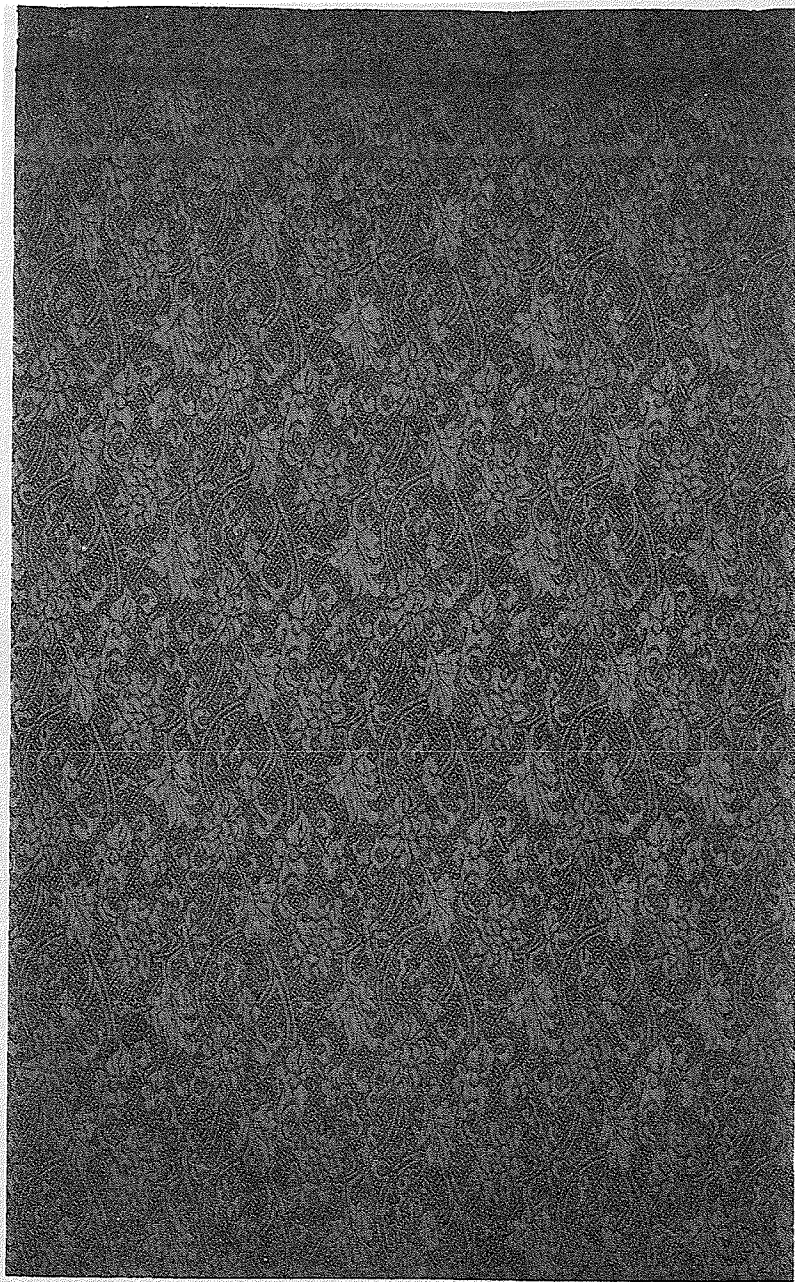
十八才(ウヲ墨ナシ)

心密師謂為_一紫雲真宮_二入檀者是佛家_一
 靈也漸機年_一以_二誦八業_三德曠_四是者是我道_一
 聖靈降有_一于_二臥五祀_三床被_四金剛三藏_一隨龍
 智也數_一給_二住_三七奉_四風_五與_六法_七天_八呼_九見_{一〇}真_{一一}果_{一二}也
 言_一圖_二案_三來_四按_五方_六里_七浪_八直_九過_{一〇}者_{一一}故_{一二}家_{一三}不_{一四}容_{一五}勿_{一六}付_{一七}法
 者_一今_二有_三以_四却_五美_六信_七心_八受_九者_{一〇}誓_{一一}心_{一二}娑_{一三}業_{一四}者_{一五}說_{一六}矣
 十_一轉_二用_三明_四盧_五深_六黎_七惠_八朗_九之_{一〇}立_{一一}淨_{一二}言_{一三}三_{一四}千_{一五}未_{一六}句_{一七}甫
 就_一卷_二其_三空_四量_五之_六深_七則_八協_九佛_{一〇}之_{一一}說_{一二}其_{一三}空_{一四}量_{一五}乎
 亦_一未_二行_三後_四已_五謝_六而_七已_八誠_九彼_{一〇}前_{一一}行_{一二}以_{一三}上_{一四}江_{一五}之_{一六}經
 以_一中_二仁_三乎_四權_五既_六而_七次_八祖_九行_{一〇}之_{一一}說_{一二}史_{一三}往_{一四}日_{一五}言_{一六}處_{一七}傳
 四_一智_二法_三至_四者_五區_六舍_七箭_八之_九斷_{一〇}得_{一一}探_{一二}聚_{一三}近_{一四}信_{一五}統_{一六}統_{一七}
 根_一接_二法_三侶_四之_五中_六患_七之_八暗_九以_{一〇}難_{一一}照_{一二}戒_{一三}味_{一四}未_{一五}滅_{一六}癩_{一七}清
 殊_一傳_二誰_三識_四有_五鏡_六長_七居_八相_九耐_{一〇}奇_{一一}歎_{一二}法_{一三}解_{一四}流_{一五}乎
 第_一深_二入_三乎_四向_五遺_六韻_七禪_八樹_九梧_{一〇}枯_{一一}不_{一二}過_{一三}傳_{一四}透
 之_一戒_二竹_三為_四壯_五令_六微_七空_八血_九脈_{一〇}之_{一一}嚴_{一二}不_{一三}得_{一四}許_{一五}煙_{一六}時
 竹_一為_二恨_三令_四得_五作_六巾_七乾_八時_九豈_{一〇}瘠_{一一}以_{一二}極_{一三}難_{一四}衆_{一五}然
 覽_一舍_二年_三以_四鼻_五隆_六隆_七之_八加_九然_{一〇}信_{一一}願_{一二}各_{一三}者_{一四}諸_{一五}畢_{一六}然
 元_一八_二祖_三呼_四早_五養_六際_七等_八白_九必_{一〇}字_{一一}偏_{一二}之_{一三}招_{一四}義_{一五}矣

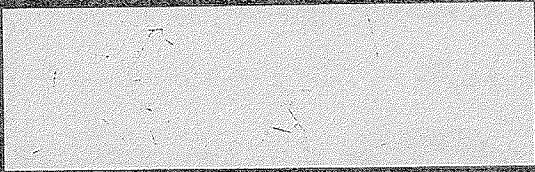
竟傳清淨初夜（白雲傳教）
 免秘密清淨之行法者言竟甚深（無執念）
 浴首水者二氣之露易得皆保覺化者（業）
 之蓮即開羅入難登高於十二磔雲區極區知
 深於八河濱海邊使月氏者龍控并八鐵塔（）
 傳念自域者弘法大行廣養義誨（賜教訓然）
 自與化密受此字已稱于品（品品量雖小務）
 凌升弘（長通馬繞受明藏）卑下留南惟
 士（懷真矣）傳念則（權頂）亦今受者（宿因多）
 筆素之賢（冥應）念志抽誠欲受雨（了）乎
 可早無深遠（大適更滿瓊高）悲（北）少僧
 戒珠不磨法燈（已）瞻黎授前賢（）既晚踏香凍
 撰加後業（）作（危）雲雷（）符（）准（）徒（）欲（）絕（）佛（）許（）靈（）誌（）



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印



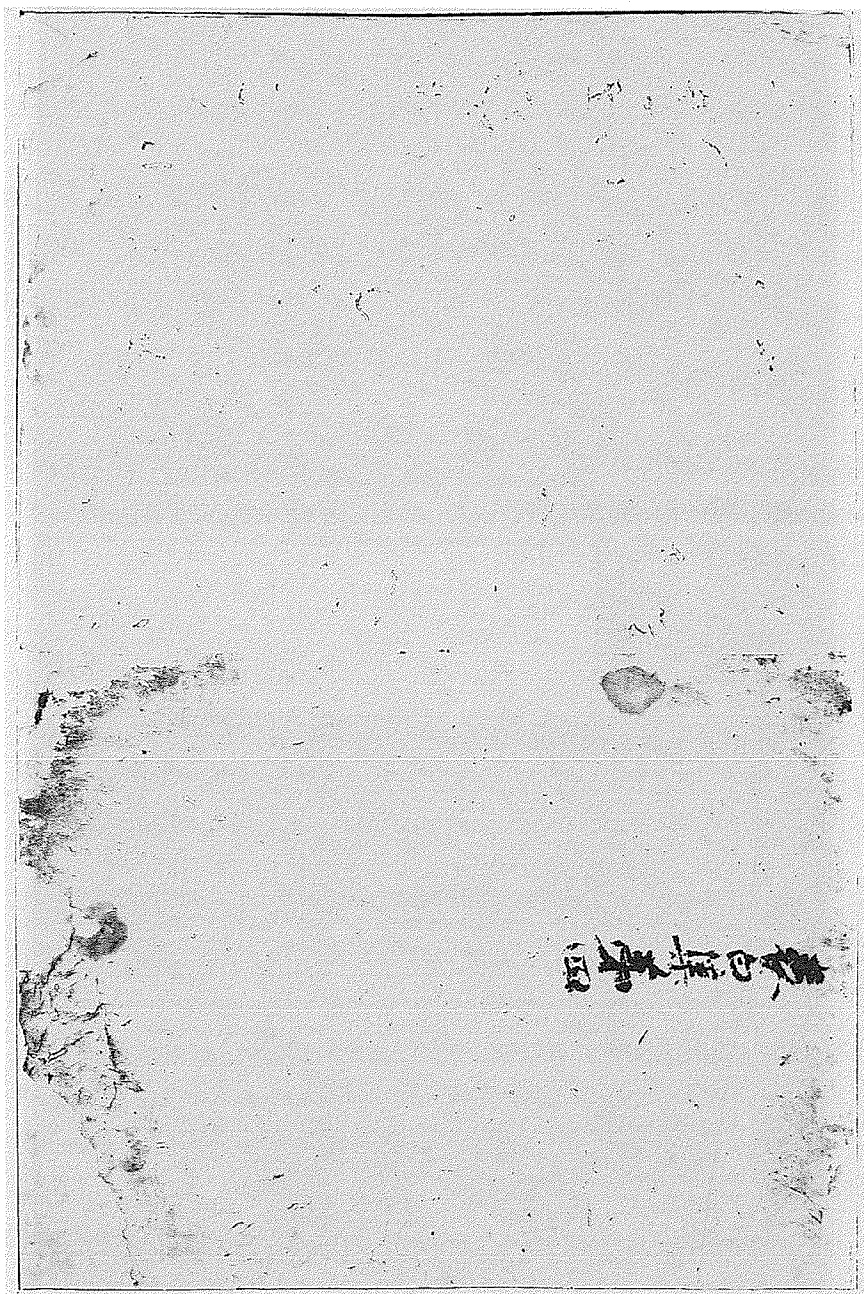
京都女子大学蔵表白集解説並びに影印



K 196
3
109
2



二四七



應為治者之知竹葉實、梁盤為成者有者
 金釵高同載之卷勝、勢三觀桐菊境
 日如天行因生未成、成就與量伸也 卷戲
 刺起五層之浮面、今亦較旋之弓 傲行謂
 練記、今身只採述之地物 豈字重境
 志、心之路非後精動 外者空達美景建
 水屋之月、凝鏡中念 之橋、常行跡 兼道
 於塵、秋之月 空假中、一觀 更陰、素真於
 遙碧、點野 如音、張無何有之境 惟思、思拉

早始、飯山而 遊、信清涼宜溫之 岳、水頌
 輿焉、點 如、戲傍 之初、冬天 燄、世之軍雅 奪
 我、舌肉 宜、然 于、香 於、際 際、却之際 燃、輝 外、然
 宜、真 言、者 識、者 于、學 而、定 伏、作 於、上 院
 秘、之 教、建 生、律 易、之 因、誠 知、文 提、者 如、張 不、可
 走、賢 塔、高 妙、之 奏、梅 詠、身 之、跡 密、感 滅

除塔供養表白 醫權

表白集卷之二
塔位 實養 付 實養 付 實養 付
 塔位 實養 付 實養 付 實養 付



之皆禪方便之天不說憐愍之有也二美廻
 臨幸之彈仙官聲之化之歸得相靈集暫
 移龍尾之行美保月來法席尚之盛况舉
 懸張齊越牙造經越致糾若也西唐青龍
 之沈妙旨佛調暗迷子君自聽之顯氣莫不用
 翰先致善善報奉祈如院於陽水已異甚汀
 有清之期始於禪屏伴少室三峰之巖如六帝
 因說靈爽之仁重曆久空圍玉姬娥之德崇界
 鎮長院富去清屏善保非招之捨辟去原中
 高時留筆行之舒象海有清地廣搜子只願今此
 塔波傳丁石如舟檢粉壁之穴元疾養也連照伴和
 近掩入中金鑿寶鈴之合音也上旅有頂下繼
 無同含鐵其仰首之者忽發烟地之愴非情觸
 甚致之者咸萌喜提之禮子迴向斯利靈慈致白
 潘諸卷表曰說王平作者打等
 又以歷然而難忘者慈文聽月之德也送也
 而難忘者慈文聽月之德也送也
 敬且差也溫天之定三行事孝為年美大

三才 (ウラ墨ナシ)

號之。都行中早朝。入觀。自愛。不堪。多。年。之
 惡。意。愈。音。因。敢。見。謝。德。之。正。不。如。塔。破。疎。遠。始。善。
 果。高。帝。城。之。凶。難。達。中。寶。之。游。圖。鳳。皇。冠。之
 揮。時。天。眼。迷。迷。地。涌。出。之。舊。冠。金。銀。寶。鈴。之。振
 吹。風。耳。後。虛。空。丈。之。割。彼。彼。散。沙。圍。之。戲
 巧。德。無。量。兒。花。花。丹。膽。子。檀。香。子。卷。葉。葉。葉。葉
 之。割。秋。勝。利。不。測。元。氣。者。益。金。玉。男。於。節。年。但。伴。塔
 大。施。去。也。奔。于。生。之。日。殊。成。孤。願。而。怪。歸。也。來。畢
 歸。木。之。如。忽。赴。泉。環。之。跳。余。弟。林。大。泣。武。兵。屬。號
 歸。三。劫。河。諸。如。雲。之。掃。以。如。生。如。死。如。實。如。虛。如。想
 可。是。頂。年。留。爾。游。之。故。卿。在。臨。遺。風。樹。之。恨。今。日
 送。西。方。之。淨。刹。初。資。月。輪。之。相。二。子。之。怒。空。如。此
 諸。佛。之。如。見。高。龍。走。高。屋。奪。時。年。之。濕。滅。之
 難。津。考。行。之。道。年。邊。禮。畫。音。以。官。見。之。靈。及
 脚踏。塔。味。之。地。勢。云。已

佛。堂。四。寸。基。泥。香。燭。表。白
晴。信。拜 晴。信。拜

南。瞻。然。門。天。自。年。國。祚。定。之。王。茲。一。心。清。淨。之。悲。願
 身。三。乘。相。應。之。法。念。身。六。善。集。之。命。之。秋。傷

并嘗對命之始也後世口誦其之脈絡
 與本意造塔如德之真文體也如拾得之軌則後園
 暇閒題之詩春行頗有趣之何堪附意者味
 仙四極也倘非常信不克之境境非遊教長生之
 空之未悟金剛堅固之義誠空死之方若若若若
 長生之術可及法也彼所購軍論昨之名難實
 語林有與音聲都先師之看都金音城含送
 塔味即之七帝住遞那一之指中在友友富
 其解上塔妙曲一如如未未持持之林樂在蓮蓮年
 價未其益音金則善根之道隨廣之先先塔塔塔塔
 之源從德德空空鐵鐵云云乎乎以以彼彼之之教教於於此此塔塔
 之善願之空實有有教教之之實實隆隆之之德
 算數白威威非非法法之之聖聖胎胎乎乎龍龍智智而而之
 惠令千千年年林林又又法法教教之之威威力力也也人人是是聖聖之
 依身其危做做踏踏毒毒水水世世有有九九妙妙之之權權死死其其怨怨怒
 疎測滅滅非非三三寶寶之之積積功功乎乎保保百百年年之之寶寶命
 舉不如如是是已已極極者者未未盡盡也也臣臣平平乎乎亦亦不不朽朽性性也也

五才 (フ墨ナシ)

標為天鐵塔（道安）小兒之音斷（德）

十年之并兒大（金）鎮盡徒七百餘

跡似額（齊）願海志（知）聲明（而）今（年）時相富

上陽中春良辰美景（即）其祥感相（應）甚堪欣

蛇之時節（之）介則中陽（月）前（天）人笑會（隆）善

之美（品）亦（至）同（輝）耀（之）媚（潤）竹（之）首（如）之散

毛飛（風）如（雲）花（積）吉（如）之宜（少）香（宜）宜（風）似

入（與）香（碎）茶（之）境（清）之（六）味（勝）沛（頌）成（地）者

欲（為）今（者）唯（之）文（之）錄（兼）同（靜）花（傳）卷（之）錄

句（鶴）洲（波）平（月）對（千）秋（之）笑（自）起（陌）芳（香）露（集）宜

畫卷

身羽（金）對（院）倦（養）兼（日）中（年）作

文（法）仲（日）現（瑞）先（姬）回（天）之（統）清（水）湛（沉）瀾（潤）

東（夏）之（國）自（合）呼（降）下（皇）後（小）年（安）展（皇）不（歸）

仰（佛）陀（迷）道（場）各（太）上（法）皇（仁）風（蓬）雁（天）

望（澤）昔（緝）四（海）早（進）寶（德）無（忽）泰（晚）展（辰）集（少）

棄（之）猛（難）責（循）探（五）智（之）併（兼）全（論）德（維）

嚴編翰鐵塔之流輪也專創始於臨之河原基
 跡音牙翁隆密教之秘當春秋久迴自茲漸顯
 達祇園之舊觀始山之橋卜高皇傳漢明自鳥
 一膝錫浴水之砌連精舍出水泉石之湧涑充
 如何轉建池之風流屹宇高量之壯觀也遂靈
 華嚴也志之壯嚴空是殿宴樂淨刹之行一忒
 正統之中自殊他利極之敏十有合誠之素範也
 加之六八之慈航珠道推於基堂之建基也
 妙嚴佛儲流矣濁世之野蕪矣是以佛劍出
 養之紀垂鍊盡金頭丈六經是妙法之真至靈信
 近寫數軸便探暮春之良辰開蓮眼於野苑弘
 之密宇新聖輪伽之壇場多儀律集於現土傾入
 之妙造三十四之淨品甚寫此塵千言亦之聖聖區區
 驚無親近思掃之圭陸六申忠乎周忠遠外
 然之天本同胞皆至善法若欲則加蓋之特恩
 金鑲惠光於三朝大王之正躬遂持寶筭北
 百歲矣

皇初尖薩夫空樣養來自流音也
 傍作

七才(ウヲ墨ナシ)

依前始吉宣散之騰葉采為日識之禮若剛至
 美勤行之妙自筆適月先之教法爾暮變幾
 佛日已梵陣痛寐懸一酬法來之源聲心法
 佛法僧之真助欲滿規當來之弘願方今歲
 大夫者摺衣地者諸佛之化身慈悲日誦輪高跡
 者冥道之尊夫裁粉外外隨培做淨鏡淨至
 罪福權權對失符籍与百無之奇樂教履存斷
 狂怒馬蹄波及公未不悔查傷達馬之精兒說
 法號德卷實無量已定明春年同瞻宿養恆忽
 默文亦之尊像故要充輝三精念不日之儲播也
 人階始欽漢希代之祈願之冥與盡隨書欲微
 而城達曰天子之祠初驗已治五矣漢車重排突
 魔之室據持可專養生却已會於未嘗皆欲
 敬誠於世也

上西門院北山味堂佛會表為齊濟所作

厚又太聖地息光平者于周穆齊昭之林教
 用覺秦業傳平加仁天長之時拜加攀一
 真句欲與河不靈四環方做教以世而監金

衛之債之革連而不聞者皆四五千之奉
 而有退產狹申查待措修始未可因留善意
 是則權用執馬之者賦（天）而（命）於選風之（風）
 性臨解（解）覺者到（念）而（終）自（興）雲之龍（秘）密之
 歡且義夫（伏）惟
 禪定仙院安瓊樹之寶種吞金杖之靈米稻粥
 月前初著頻藝皇溫薛之孔負神符風度優
 萬聖孛木之聲喚響鑿鑿光於連山懸后位
 似年久添嫩孛於姑油祭幽燄以日新生動既
 乞嘗研偵憶（身）言綺語之卷浮日對鏡自欺
 生死洋着之過撮悔之悲語啼味無休遂似晚
 籍公奪勝婚真實之面味於公難述甚符風之
 聚園園立砌之窟非不好通患於藏之莊嚴瓦棘
 金屋之飾非不優擊心於齊生之淨刹育（了）
 東洛之外北山之麓嚴節推去轡之路怒（危）龍
 右席之地形擲難免之樞屢念成風樓白（主）
 未就其四神且是露地建於神象直之奉康佛
 則四身百德之尊守亦月照經布（草）木之玩

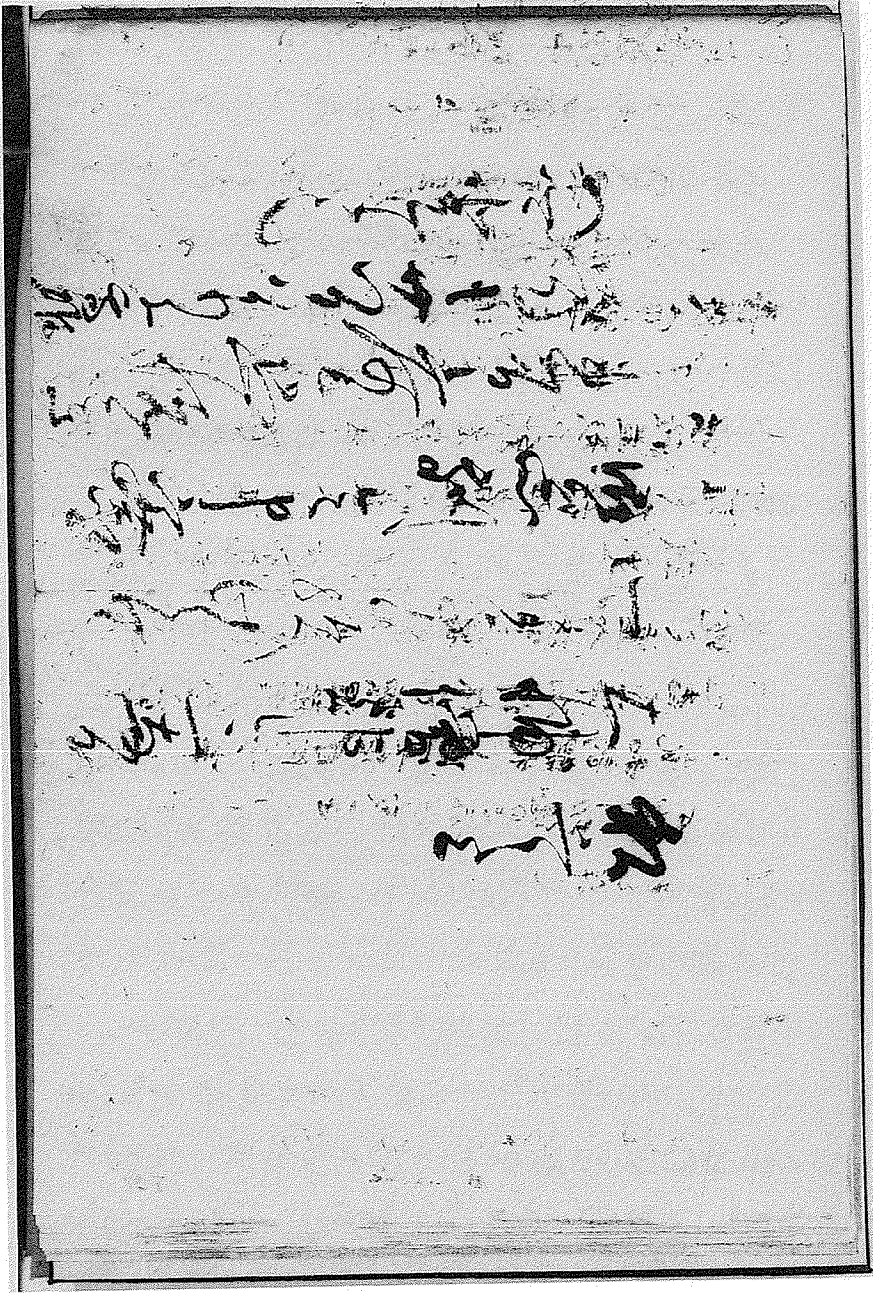
九才（フ墨ナシ）

不味而濡美知欲與截上之東樂聞者是吾子言
 粵邦女吉之句欲認成春宮境之既因臨臨相
 應二朝用春暖而孔律法全臘屏之復之聲祥
 而迎僧於馬湖正之隱作永吟之行暑隔出
 床之逐法夫到音五音佛康之床亂到包賢
 思音並射待阿達步之暖礎石無權轉轉錄
 年香花有僧願言提之傍割算亦老步藥
 到穢罪之廢之拖常侍塔燈放白
 佛輝斬獲
 坵地者路經羗一洛北速與百倚之塵境高松
 輪之停迹有再拜之坡長松洞速同雲象禪
 林谷固留僧養路水及河加沈月之浪聲
 石中巖風曉聽煉為沫霜之鐘聲音山沫雲昏
 不規羞自有老松、傾妙信本燒香只、恆爰物之
 透傾蓬布食之庭尋與益未日縮水之嚴寒不
 知此地之、水石既天經之風沈沈
 蓮華心院培養兼白中室作
 文銀花馨早臨雨灑灑沙流流龍翔塵騰

雲興而鐘鼓井比萬應取喻一寄于成推
 評定仙院爾發科之遺種來自之屋跡事
 去留對增湯沐於南陵之如鳳綸降指權深
 裁於翠嶺之位逐于推舉人同雲集素業
 真際之言提擲徧履而殿取燦眩暗曠粉之嚴
 權深法衣而入道樞羅文錦款之爾朕發靈籍
 勅之衷志除威障二因周悅弄吹以氣外銷靈
 空塵垂從之華字煙成回裏當帝城之西河者
 迤邐中風流乃勝掌起軸奇音散出匯之廣
 以草木之括匪石之利厥振力精瘳之性標祐
 登綺井先翠雀如城宛舞妍粉閣添韶媚
 而臨睨迴立三身之聖京專抽念之遊府集
 中於後如來觀音覺主者為須香面於成仙端
 風雲桃伽曼木空仁山洞長寬之詩卷先早
 遊回疎之坡祥早至華梅和浮煙之官化後
 靈像僊遺靈空滿月之元氣致於覆之切發稱
 徑物之砌斯外探地藏龍樹蒼新肆平脈所發
 妙相現珠金匠及馬一乘之經泊新二墨字以加

戴部之素軸揮音便之良辰敬獻之御願之知
 滴空聖無頌豈知感集並前復有東野仙駕指
 羸馮而幸臨傲高槐庶棘之勳也御珮也眼迷蘇
 園之園雲納雷平之雷林貝也園波為無身之曲春勝
 林暖字梅香豈上豈非豈律之使漢深兮贈豈同
 用暗送金法之音尔願之寶之真境園滿二空豈
 地塵表極園休遊於李年未西儀款替時具矣
 達臨深構而散一者之上合奉祈
 著妙南院之西覽字馳神迴之濟東場竹字
 頓極之真途同林光明之玉殿銀法身自蘇
 之衆會無衆
 聖至天國就日之仁免
 法皇始奉差水之爾永潔業宜清淨字不動聲
 就華之佳胡亦勝云為錢驟乘之潭池也歌
 辭爾併字各利登效白
 花園友鳥堂僕養表白亮信傑作
 文佛曰高舉洲罪霜於六道之昏衛法速
 流拂空塵於一有之苦海佛一切能不可

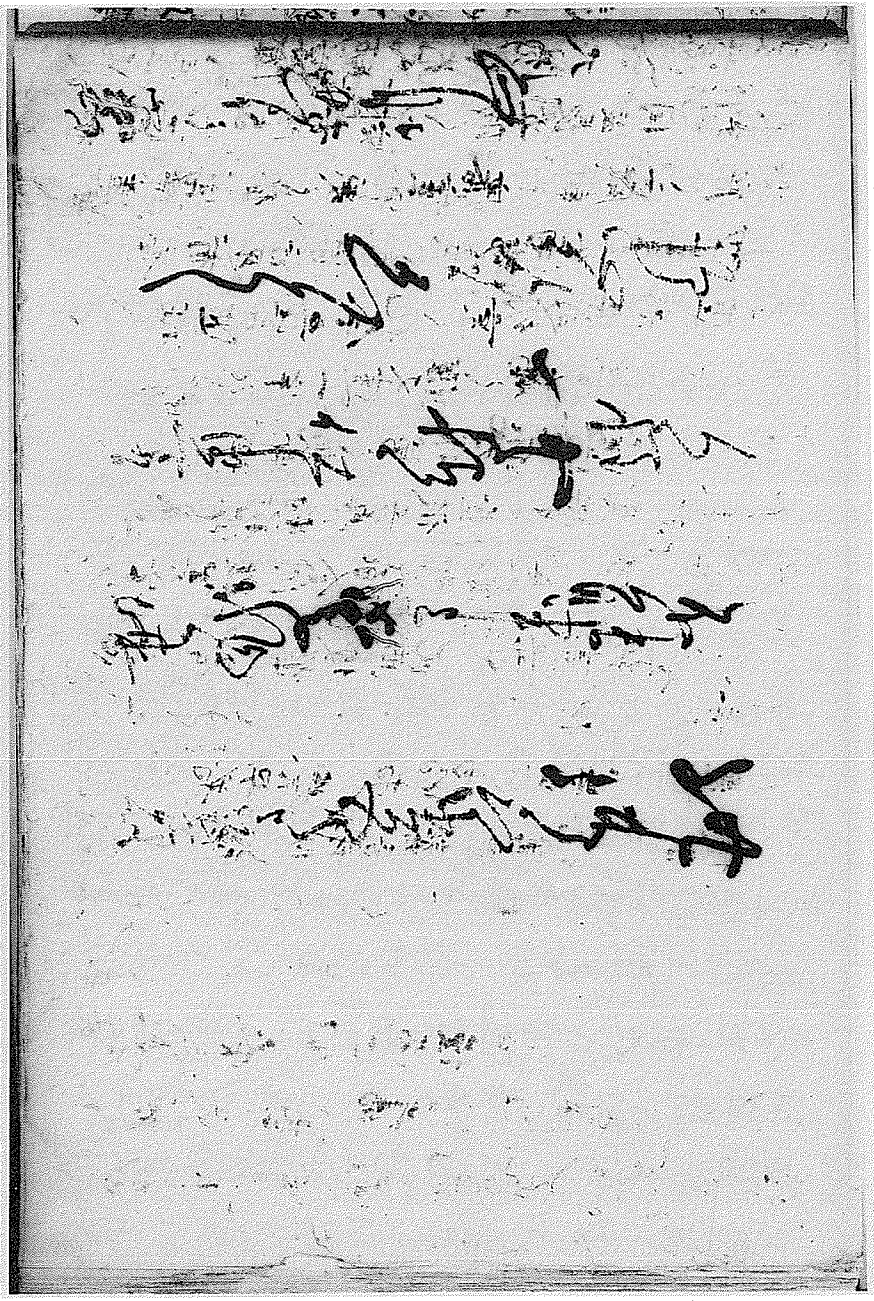
測量者意銘中論者有莫大之切須達昔
 救金引佛為激勵上之善照首早振莽
 彼皆感大果今又空勝同象安力備爾
 政不股肱難撫長不貪人用之聲聲
 善披帝幣擊高鎮木佛果之象圖遂
 構一字之伽藍金玉交色更女二將之丈
 六欲軟蓋政不對者少年年壽久作生
 和護之儀持地者地之散天沫湯合之
 罪之誠更身言流帝之政速速慈地
 成能之盡合聲二器之供其言廣一日之好
 會也為之洋砌竹林之樹溫羅羅儀之弊年玉
 孤山之虎和韻觸物之感軍眾自歐穿中興緒
 大隨言繼爾和德也亦併歐二者之即欲濟塵無限
 音利之意之群也
 善守頭布結性善雲供慶教白日合
 又佛法境中者明其明之光澤性水亦照昇教
 聖將疾風之響響拂者塵而歐白善甚澤切德年
 測量者深自考焉而根器百于切者地人有罪非等



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

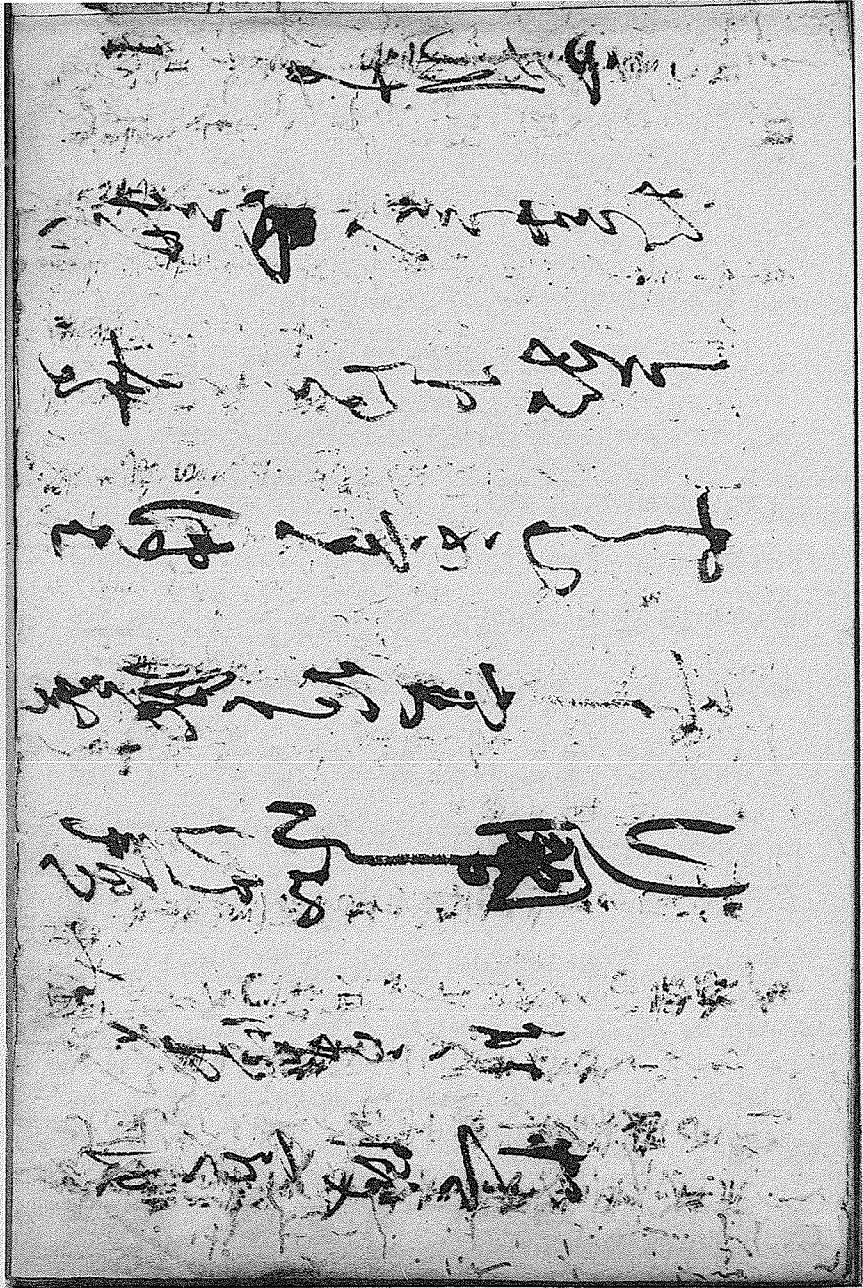
吾字國難得故僅過者非一毫之搖穗同者做現
 士由出之氣亦令天施之病善澤厚亦值難之
 遺法感應相叶更因節中一秘名實定年氣飽過
 浮木優范之用遺海之斯特不勸供者行日期再
 勸氣之確東少火有之安控在玉磁子境靈私
 之傾皇自表恭敬之色帝身之敬廢忽和每有之
 辭聲者佳聲踏顯聖之畫入國之言時律者甚
 其華聲高命之聲傳泉之响丸之聲嚴嚴頤寺抄
 其亦一生曠作懸懸為不斯其誠謝至靈也
 清之哀之面命生則其嘉新員德新弟子未
 轉論道而世皇言之說就極其又新樂舞也
 孫才似院而律良反展性養之併臣在學也
 凡紀所優之過備歡呼密箭國之行儀數
 區也豐勝善地才速疾裝劍以此瘡夫之去久
 待百歲之盛剛其辭言之辭行由二卷之版
 張帝行學海之通階預利益伽監亦程幸
 祐尺之儀待律法盤昌定健其再之出世
 奉焉故二憐院之香障寺通儀養表白微院
 史之今日者聖靈降示請二條之仙之靈言

之與隨兼大陽（先如馳尊陣之云爾）
 之判也（同茲長本城）小宮音院之西味村
 此辰（靈斷雜曆）曆（義）與（律）宮棟簾斷
 之妙甚（奉）正滿端嚴（尊像）昔是有者改之
 曾於大群長詩瑠字（礼）今之吟世福（道）
 揚（也）而情屢夏福（博）又連一字（精）會洪三
 味（之）其蓋理依（力）累（觀）斷（專）四（右）相
 迹（應）福其法甚（直）被（方）舟（將）所（備）堂（堂）莊（莊）
 匪（以）時（善）根（在）於（無）節（亦）家（舍）莊（莊）堂（堂）字（字）焉
 二乘（之）句（句）偶（偶）書（書）去（去）詠（詠）從（從）典（典）優（優）越（越）借（借）養（養）（下）
 賣（賣）善（善）徑（徑）（罕）
 聖（聖）靈（靈）衝（衝）桀（桀）穿（穿）空（空）之（之）物（物）由（由）之（之）鑿（鑿）答（答）早（早）者（者）夙（夙）圖（圖）
 位（位）之後（後）通（通）三（三）也（也）遠（遠）早（早）靈（靈）豈（豈）我（我）秋（秋）懷（懷）一（一）德（德）也（也）礼（礼）
 譯（譯）音（音）厥（厥）德（德）之（之）詠（詠）詩（詩）書（書）礼（礼）樂（樂）之（之）過（過）中（中）也（也）三（三）保（保）
 君（君）臨（臨）仁（仁）也（也）而（而）履（履）鍊（鍊）之（之）祿（祿）非（非）長（長）准（准）遂（遂）七（七）年（年）之（之）寒
 燠（燠）實（實）算（算）之（之）連（連）是（是）短（短）德（德）遇（遇）二（二）而（而）春（春）飲（飲）女（女）所
 所（所）定（定）之（之）身（身）迷（迷）誰（誰）堪（堪）家（家）焉（焉）之（之）祿（祿）而（而）後（後）當（當）相（相）故
 密（密）者（者）之（之）流（流）信（信）觀（觀）之（之）現（現）金（金）轉（轉）王（王）之（之）也（也）



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

八方之透糸（透糸、黄、難、字、賦、倫、可）
 圓宮（圓宮、透、糸、難、字、賦、倫、可）
 組（組、善、天、席、之、以、水、觀、定、信、賢、善、共）
 東十善（東、十、善、之、福、因、誰、春、百、幸、之、再、春、本、志）
 芥（芥、之、於、水、在、吐、於、之、暗、市、泉、之、波、易、透）
 霜（霜、之、煙、空、風、之、誰、而、聖、痛、難、免、互）
 帶（帶、之、留、波、成、是、流、遊、歡、之、何、言、悠、長、氣）
 原（原、之、擬、信、似、妙、姓、之、幽、如、空、外、相、子、總、之、此、傳）
 製（製、之、嚴、細、毒、孫、之、廣、有、水、流、白、雲、盡、奔）
 境（境、之、去、而、月、華、香、賦、高、地、請、賦）
 龍（龍、之、顧、之、馬、與、速、角、煤、蟻、之、所、術、中）
 馬（馬、之、所、術、中、之、概、也）
 故（故、中、之、此、方、志、行、之、高、地、請、賦、者、發、作）
 史（史、之、極、繁、心、之、成、利、生、以、氣、狂、乞、大、已、柳、歷）
 心（心、之、誠、之、如、白、先、行、二、玉、法、款、之、一、國、之、由、三）
 行（行、之、為、煩、蓋、作、之、就、高、行、之、玉、帝、起、究、幸）
 之（之、從、其、蓋、甚、存、幸、焉、之、於、發、賦、賦）



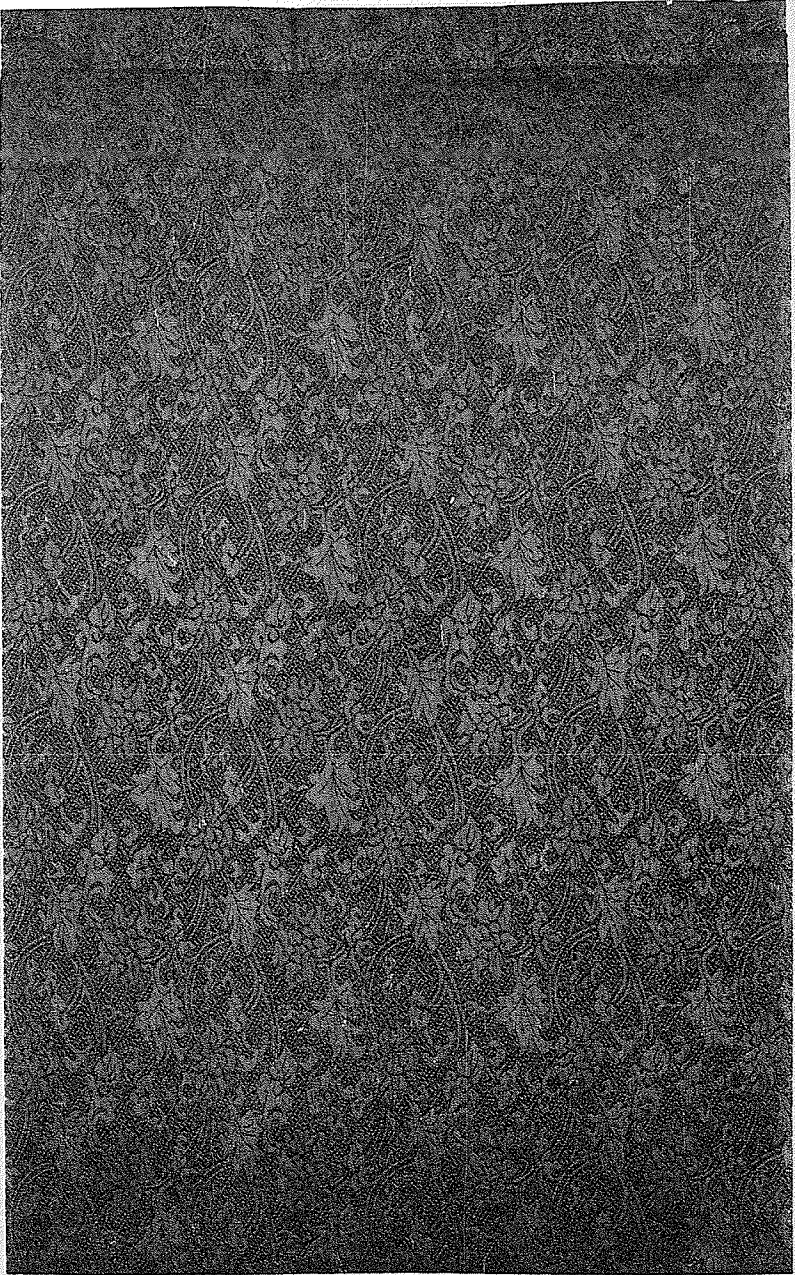
京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

六句、年早過、一形、後、盡、長、為、城、空、畫、幕、
 遷、祀、(能、瀧、繪、打、外、標、成、添、作、) 結、采、御、每、
 肯、於、茲、卷、前、之、讀、(讀、之、誤、) 延、壽、於、其、所、
 演、後、後、終、對、之、也、耳、中、尊、便、是、志、而、五、塔、
 (螺、末、者、者、賜、信、區、非、奇、受、事、殆、之、丈、之、以、
 者、海、妙、業、取、數、部、之、奉、朽、宅、之、平、吉、出、牌、
 定、引、一、座、之、非、密、藏、(能、更、今、日、打、海、行、其、
 願、也、不、降、轉、) 身、暗、示、之、後、教、(得、思、氣、類、
 歐、那、有、會、謝、意、) (與、教、命、教、趣、之、意、源、火、五、
 較、且、之、意、清、聲、舞、狀、新、其、機、亦、祈、彼、陳、三、覺、聖、
 備、故、信、教、之、受、驗、屬、於、自、行、也、如、佛、流、單、傳、四、
 疎、於、金、剛、薩、摩、曼、德、供、向、題、語、其、福、同、既、中、十、
 者、(貴、檢、與、其、時、昭、空、空、東、部、) (皇、業、業、隆、號、
 之、通、託、二、聖、派、字、標、社、陸、五、月、之、轉、悔、(玉、子、
 也、現、身、) 時、早、唱、佛、音、聲、蓋、於、日、乎、在、海、之、宮、
 欲、之、深、滅、(刻、意、得、行、生、能、有、佛、如、公、翁、
 五、示、證、賢、權、聖、) 與、同、作、實、盡、慶、(三、護、慶、
 四、世、以、臨、應、道、) 而、行、身、(子、子、開、國、) 以、致、直、靈、發、

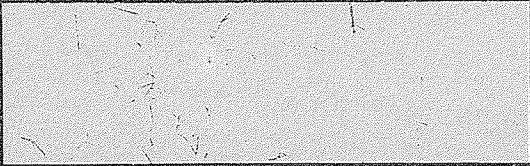


京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

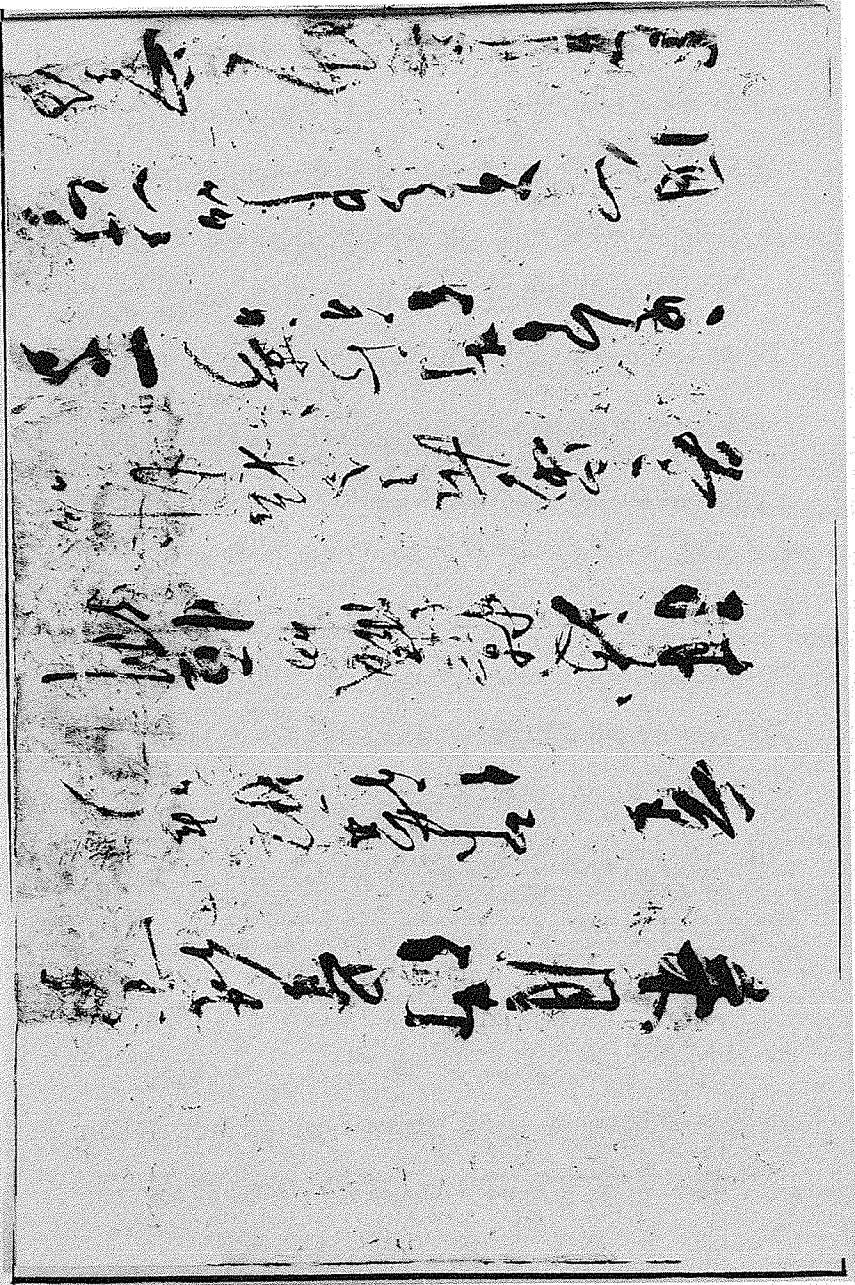


京大蔵書
3
1999
3



二七五



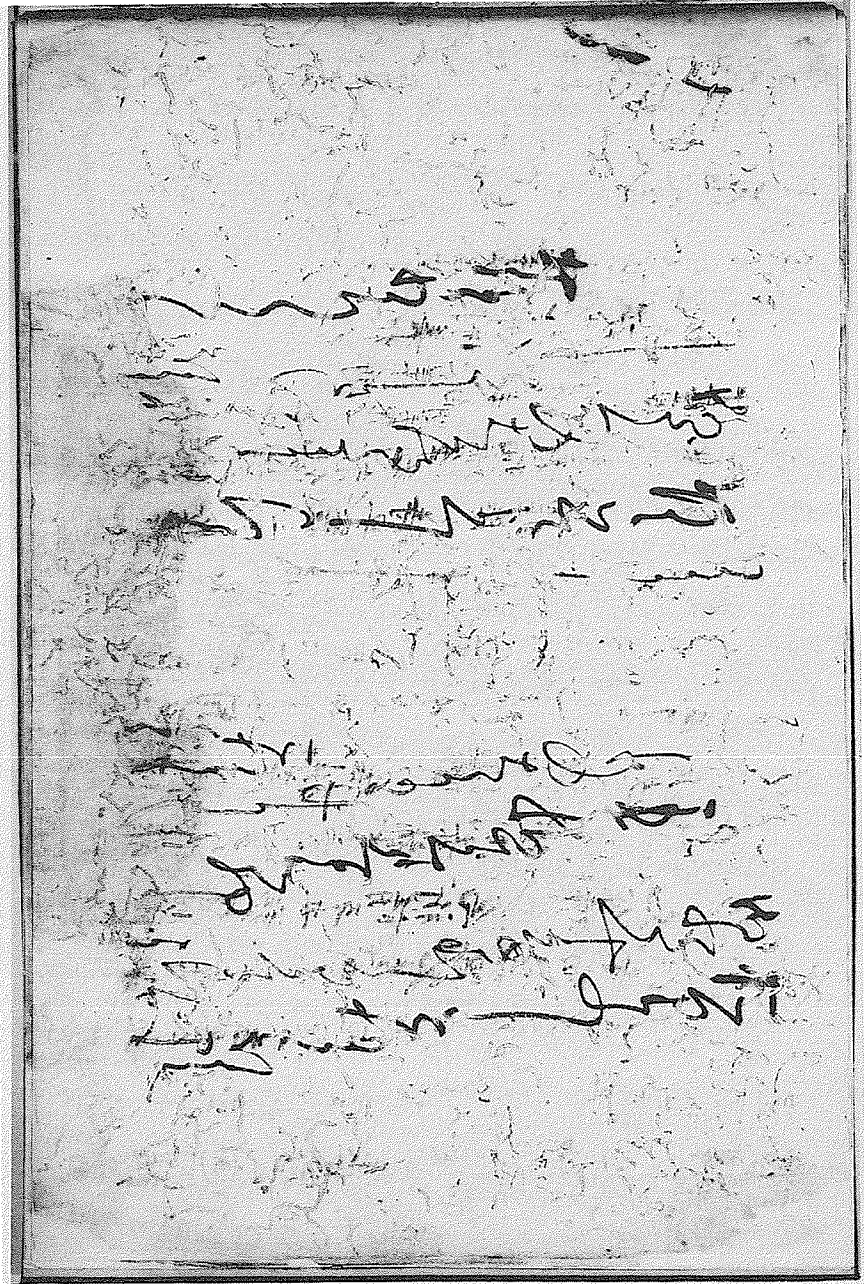


京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

昨隨類應物私權與公權相社之持券之
 圖想所束縛莫不嚴就欲情中富賦不非霍
 之饒懷才已不雅奏入清閣不終龍珠不珠
 復不大車不街不敘不靈不花不露不紅不傳不散不而不於不年不
 紫竹煙練慣不及不於不躁不如不之不受不冊不余不步不靈不肌不
 坤乾妙鹿之陽在眼揚華規不也不無不除不化不唯不
 之不深不清不同不於不光不壞不息不星不旋不游不漸不近不津不豐不普不無不
 者之重劫不念不泰不景不取不上不精不動不生不弟不善不是不
 評現不是不明不設不之不月不照不心不空不苦不言不柳不花不空不播不身不舞
 之不風不輪不獨不響不牙不子不之不聲不外不逆不緩不南不漢不之不效不其不議
 觀憶聖朝之不靈不信不貴不程不之不繁不而不子不之不榮不華不先
 當不理不相不日不夕不月不之不皇不月不天不降不之不津不象不流不流不流不流不
 蘇不身不德不澤不百不之不所不未不編不之不案不恩不致不水不皇不是不
 回不為不欲不金不難不而不繼不濟不之不匡不可不以不美不團不夢不之不然不若
 歎不鳴不其不衣不統不之不基不才不久不行不專不裡不之不祥不介不
 賦不情不身不意不贊不有不娠不不不知不權不比不天不聖不依不誰不亦不常不味
 意不者不巧不炊不火不者不知不想不字不實不伸不為不助不邪不路不善不回不嘉
 然不以不區不亦不透不衙不則不令不受不德不於不余不上不際不之不六不壽不

不須廣而歡之二原流探骨三專司之四鐘
 象于觀歡五齊發六證明七檢看八應九如十箭十一美十二運十三京十四塵十五
 曉十六明十七信十八送十九為二十實二十一古二十二新二十三效二十四并二十五瘡二十六之二十七度二十八比二十九未三十復三十一
 自三十二登三十三味三十四仙三十五苦三十六長三十七之三十八添三十九句四十乃四十一至四十二望四十三止四十四皆四十五拉四十六福四十七
 建四十八之四十九苦五十中五十一當五十二中五十三產五十四時五十五仰五十六空五十七為五十八用五十九真六十者六十一獲六十二
 作六十三字六十四短六十五令六十六微六十七打六十八仍六十九不七十致七十一用七十二此七十三即七十四草七十五
 臺七十六皇七十七仁七十八經七十九非八十終八十一非八十二水八十三昌八十四錫八十五所八十六斷八十七
 益八十八閉八十九賊九十言九十一守九十二心九十三盛九十四感九十五而九十六相九十七早九十八降九十九臣一百土一百一埋一百二於一百三岸一百四地一百五泥一百六
 乞一百七詰一百八直一百九精一百一十誠一百一十一善一百一十二立一百一十三地一百一十四之一百一十五感一百一十六應一百一十七其一百一十八光一百一十九情一百二十終一百二十一在一百二十二
 深一百二十三月一百二十四補一百二十五法一百二十六之一百二十七數一百二十八於一百二十九不一百三十宜一百三十一錄一百三十二難一百三十三記一百三十四下一百三十五之一百三十六條一百三十七備一百三十八五一百三十九折一百四十大一百四十一
 上一百四十二子一百四十三帝一百四十四採一百四十五大一百四十六上一百四十七皇一百四十八出一百四十九可一百五十區一百五十一端一百五十二初一百五十三愧一百五十四一一百五十五千一百五十六身一百五十七難一百五十八重一百五十九
 西一百六十討一百六十一專一百六十二後一百六十三自一百六十四九一百六十五五一百六十六之一百六十七備一百六十八信一百六十九符一百七十元一百七十一滿一百七十二而一百七十三初一百七十四海一百七十五自一百七十六盤一百七十七
 務一百七十八補一百七十九聖一百八十祐一百八十一護一百八十二好一百八十三虛一百八十四用一百八十五之一百八十六占一百八十七象一百八十八外一百八十九之一百九十氣一百九十一栖一百九十二衣一百九十三豈一百九十四字一百九十五
 謹一百九十六夏一百九十七明一百九十八與一百九十九吉二百周二百一大二百二陽二百三欲二百四飭二百五雖二百六履二百七屋二百八舟二百九之二百一十無二百一十一惡二百一十二載二百一十三
 盡二百一十四填二百一十五且二百一十六輪二百一十七之二百一十八有二百一十九偏二百二十駑二百二十一乃二百二十二寫二百二十三真二百二十四定二百二十五生二百二十六命二百二十七勤二百二十八於二百二十九不二百三十深二百三十一
 此二百三十二致二百三十三者二百三十四輒二百三十五專二百三十六附二百三十七此二百三十八斯二百三十九差二百四十生二百四十一宜二百四十二屏二百四十三之二百四十四數二百四十五值二百四十六
 御二百四十七音二百四十八其二百四十九真二百五十三二百五十一發二百五十二者二百五十三濟二百五十四非二百五十五校二百五十六食二百五十七之二百五十八燒二百五十九終二百六十各二百六十一水二百六十二生二百六十三流二百六十四
 卷二百六十五上二百六十六交二百六十七氣二百六十八痛二百六十九之二百七十卷二百七十一本二百七十二向二百七十三文二百七十四發二百七十五斷二百七十六之二百七十七卷二百七十八後二百七十九送二百八十

小引 讀書言上
 為難者至二即給甲領同難
 被下新狀今不申狀送
 甚畢此上京埋金頭送也
 經者經苗作毛教書難
 坎者坎者易易
 不自此台進子儀
 才給甲先度言
 千金不申陳狀送送目此條
 自至先往所成是非可立
 子細一願喜首茶陶裏陳書故
 聖理之至金路
 聖書作毛教書難
 者下脚日教書言日終
 匪為狀西言加本

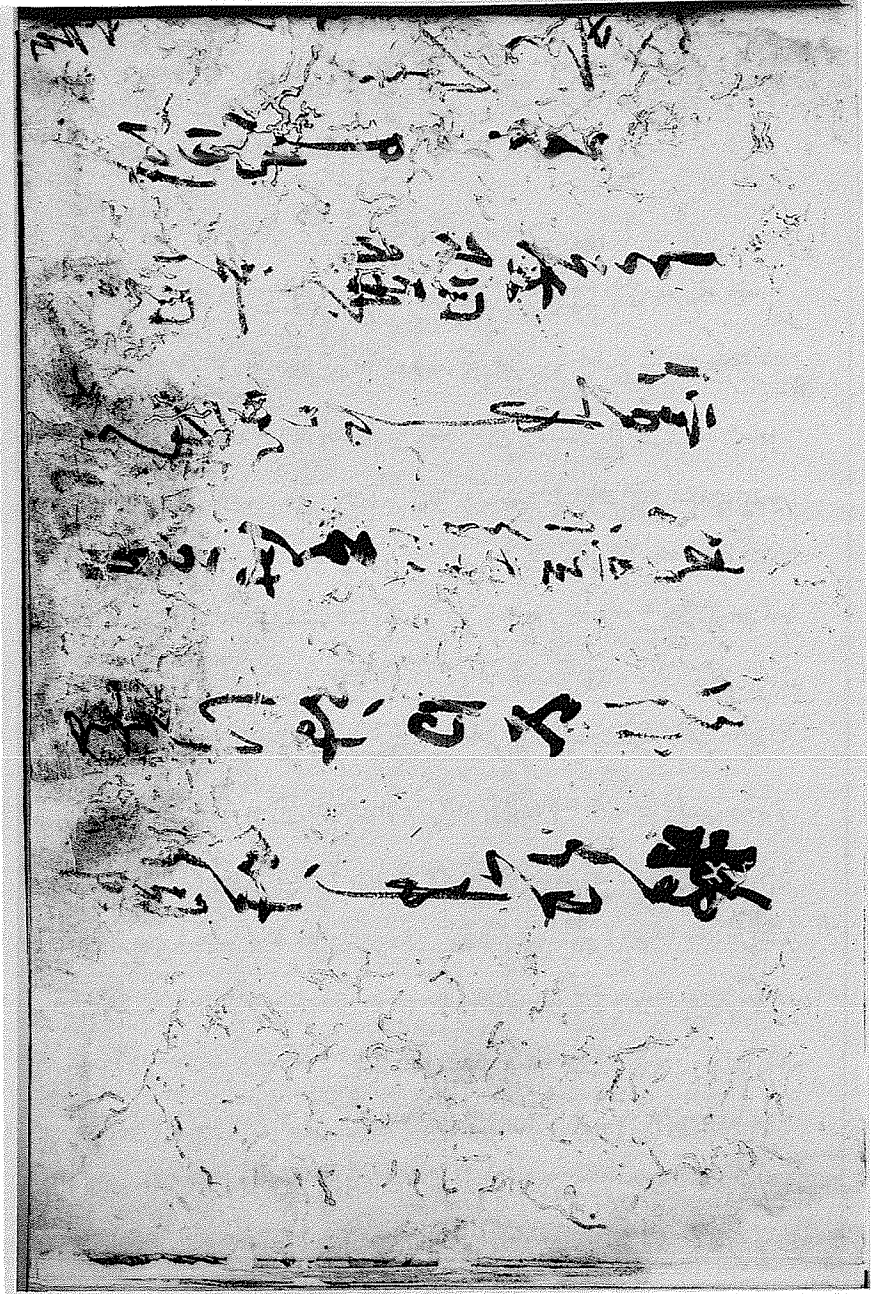


京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

此信痛痛亦痛一此日
 中一何如汝尔了可耳
 名(名)入汝汝日汝日
 何如汝尔了可耳
 名(名)入汝汝日汝日
 此信痛痛亦痛一此日

京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

高僧僧而住住安高之月月發發真如真如疑疑通通者
 檣城檣城之風風之明明兼兼所所言言不不以以康康寧寧下下舉舉
 辯辯王王業業之之顯顯名名者者之之上上家家進進也也之之每每位位誠誠且且證證
 辯辯幽幽家家之之要要之之辨辨之之利利益益衆衆之之生生謀謀也也爰爰書書畢畢
 聖聖日日批批只只志志炊炊蓮蓮字字同同昨昨更更推推克克年年下下燠燠
 陳陳矣矣五五歸歸于于聖聖官官臨臨於於世世之之終終煙煙行行致致有有
 聖聖朝朝可可成成之之寶寶寶寶羅羅箇箇無無動動可可終終卷卷大大百百三三轉轉
 蓋蓋行行華華統統是是明明折折高高座座其其折折勢勢亦亦當當舉舉
 喻喻之之暗暗昧昧者者流流其其計計以以之之詞詞假假善善進進
 大大王王之之教教命命軍軍於於願願禮禮之之末末文文融融中中空空之之息息
 唐唐張張勤勤恒恒規規沖沖欒欒願願由由余余著著齊齊書書卷卷第第一一十十三三卷卷
 圖表圖表白白發發清清休休
 夫夫遠遠非非自自然然之之三三音音提提維維離離曼曼德德之之城城來來伸伸
 寶寶之之大大方方便便橋橋排排觀觀眩眩之之門門真真非非如如得得其其時時
 弟弟亦亦去去死死之之迷迷之之妄妄為為高高德德遍遍例例之之精精勤勤
 變變家家養養頂頂之之軌軌則則奉奉高高教教近近正正師師信信遍遍及及真真
 果果上上月月之之論論聖聖主主降降世世泥泥之之唯唯智智當當下下亦亦符符
 明明教教牌牌以以懷懷寫寫厚厚下下孩孩被被察察藏藏道道場場之之物物



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

文嚴霜降兮暗和豐頰之窪發都音綴水風兮

同表台

三傳行

中亦頤哥曼之胡鏡（傳）並解守之

報以羊質忝外龍象之未根次以拙獨文噴呼之

之親之大和同（傳）為得長也之世筆文列之故

本聚之靈早具分德因滴之相必昇（傳）四程之

者故山崩者德誰亦統豫作請果會聖靈悉和

痛之著于慈阜和而加比大師更親主之之操身

寺石頤於空於昇進定矣日暮來之人朋（傳）擬存五

中同空端望之實（傳）自來佛自之好經皇當

賢花肉重更煙外閑沈大和南之傳（傳）命那之空

言去抑我法親王者而橋之餘方天源之清流也

得雲量之瑞葉流於三千之佛号乎汝新韻博之密

也彼攝佛之名空城空之觀罪（傳）二尊之會（傳）羅

開識皇諸教之月（傳）空早皇尊其其殊殊亦如新故

非上京者才難達至魏威深與味齊鐘者亦欲早

秘發之聲生為內發（傳）總總慧塚其聲亦不和於空

之後嚴（傳）法尔大和南上田彼靈貝殊和精誠（傳）檢南

丈夫高院之中有勝事謂之佛僧撒撒行來尚矣
 舟遊盤腸謂之亮于聖壽生者見諸齊舍思銀鏡之
 極定親之人不以精勤驪謂之後洞謂之塞難着
 香花排佛伽藍之餘惟訂謂之始自中古云爾其後
 朝佛塔之壇場謂之起真言之軌佛所入之而

同表白

表在表代

寶繁昌(一)
 嗟年之歎高寺者傳就年之念之脫唯一
 之寶集并卷聖業同南之首風經法者德賴學
 能于獲之境位重於遠逝之秋月何差大皇
 鮮取而部之流以一朝小信有火之勢甚者亦不
 蜀漸舊亦今同者佛之途遠高材詞事之唐惜
 帝則亮子之畫唐室傳隨新儀尊師之天灰身
 既為自宗流所所指律之戒每大也言推興於說
 此會和尚始注降空九卷之甚律有兩日精勤
 作論伽藍教堂頭云亮才作于歸者也對甚法皇置
 城梅刺益之針盤先構佛名經血之城罪生善之源蒸如
 結味池之漸用波感應之道如此不堪在法流亦風切

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

部降年^ノ不^レ經^ル之^レ言^ハ事^ノ練^ル行^ハ諸^ノ律^ノ寺^ノ也^ノ勤^ノ之^レ事^ヲ
 非^レ相^ノ事^ノ也^ノ存^ル恒^ル則^レ昨^ノ作^ル能^ル也^ノ思^ハ自^レ有^ル需^ハ和^ル落^ル
 檳^ノ梅^ノ之^レ意^ハ今^ノ用^ル秘^ノ密^ノ之^レ符^ノ風^ノ掃^ル磁^ノ拈^ル松^ノ頓^ノ然^ル
 海^ノ出^ル則^レ衣^ノ衣^ノ盡^ル若^ク早^ク淡^ク若^ク根^ノ得^ル用^ル境^ノ蓋^ル陸^ノ上^ノ南^ノ
 殿^ノ月^ノ之^レ光^ハ透^ル初^ノ太^ク上^ノ次^ノ高^ク之^レ腐^ハ之^レ進^ル二^ノ品^ノ也^ノ
 玉^ノ佛^ノ奇^ノ者^ノ之^レ甚^ク百^ノ歲^ノ一^ノ家^ノ法^ノ信^ノ保^ル鶴^ノ於^テ一^ノ千^ノ四^ノ
 佛^ノ之^レ盤^ノ昌^ノ寺^ノ門^ノ亦^ノ種^ノ也^ノ
 同表白^ノ賢^ノ清^ノ作^ル

夫^ノ高^ノ寺^ノ之^レ衆^ハ有^ル一^ノ道^ノ場^ノ衆^ノ外^ノ同^ノ海^ノ内^ノ聖^ノ靈^ノ也^ノ
 三^ノ齋^ノ之^レ大^ノ教^ノ之^レ面^ノ言^ハ斯^ノ廣^ク在^ル之^レ法^ノ觀^ル也^ノ均^ノ身^ノ其^ノ
 中^ノ即^レ檢^ル贖^ル罪^ノ者^ノ次^ノ未^ク撥^ル之^レ梅^ノ未^ク以^テ故^ノ着^ル在^ル眼^ノ畫^ノ
 障^ノ障^ノ之^レ精^ノ猶^レ秘^ノ就^ル此^ノ長^ノ廣^ク作^ル律^ノ年^ノ蓋^ル而^レ定^ル牙^ノ
 大^ノ上^ノ皇^ノ在^ル往^ル日^ノ與^ル物^ノ最^ク拜^ル名^ノ之^レ齊^ノ會^ノ畢^ク觀^ル大^ノ智^ノ而^レ遂^ル後^ノ
 刻^ノ以^テ聖^ノ展^ル念^ル之^レ梵^ノ也^ノ昨^ノ日^ノ何^ノ論^ル禮^ノ過^ル現^ノ實^ノ以^テ
 馳^ル今^ノ亦^ノ清^ノ年^ノ中^ノ之^レ終^ノ佛^ノ選^ル金^ノ之^レ精^ノ身^ノ精^ノ勁^ノ頭^ノ密^ノ
 懺^ノ悔^ノ事^ノ深^ク自^レ青^ノ眼^ノ之^レ俗^ノ裝^ノ底^ノ深^ク因^ノ而^レ持^ル實^ノ
 讚^ル美^ノ之^レ聲^ノ思^ハ當^ル實^ノ以^テ不^レ推^ル美^ノ軌^ノ靴^ノ已^レ儼^ル風^ノ雁^ノ行^ル空^ノ
 宅^ノ榜^ノ上^ノ之^レ忠^ノ業^ノ至^ル資^ノ全^ノ敬^ノ聖^ノ靈^ノ生^ル德^ノ因^ノ海^ノ中^ノ一^ノ

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、

聖教之初波忽洄光明二殿之上六之秋月云曰

言次化俗之編朱珠訂次之印負鶴純經

又報方歲之標鶴洲水終鎮約土補之色不

太之采環攝之程入金塵之青鏡空作高其

股之吳素所標旗建地興藏至度之法命

奪得無息除且忠於近道一門之生結確

其津振靈動於邦家者素之先等在焉

德化遷播生振紹管統紹累代本亦由靈之

成隨素滿天衣神道高標取仰敬之是

又概左斯云

八德院舍利生養表白發摩所依

支以理智之異四系志攝平之中迷悟是司律

宣此化界之外遊空業靈惑月平憤之敬未獨

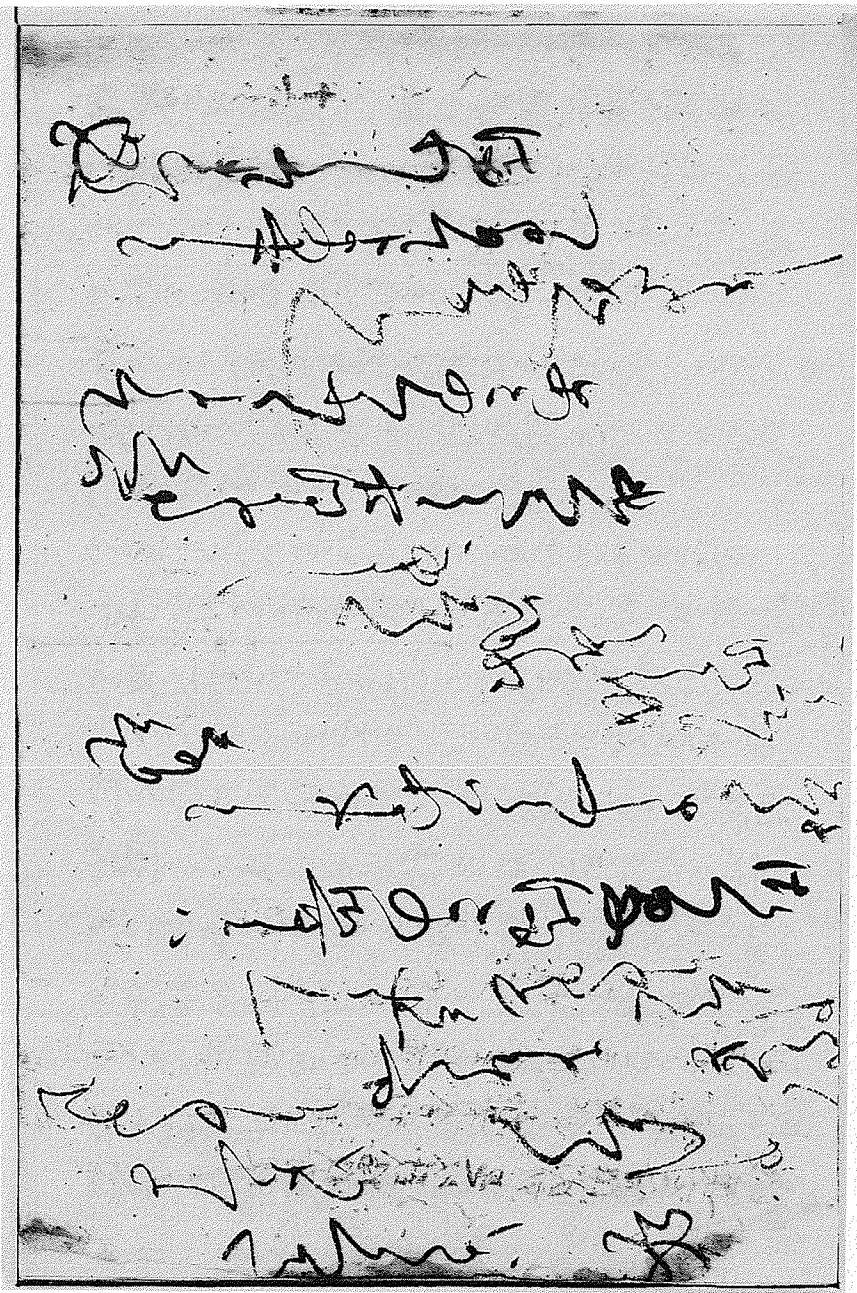
波教進止德之句互蓋如未終之故應化之靈光

薛爾辭之海頂燭之曼瀑臥落塵埃之教尋原

則道那之否藏舍利流布之形訪實之津之賢

休放標志披從之標者舍利骨副處之中作一箇

法真言皆得成就是以對陽設者復才教新神表



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、

